年次報告2014

東北大学

ISSN 2185-5196

# 東北大学埋蔵文化財調査室
# 年次報告2014

仙台城跡二の丸地区第18地点現地説明会の様子
（2014年６月14日開催）

東北大学埋蔵文化財調査室

# 東北大学埋蔵文化財調査室
# 年次報告2014

# 東北大学埋蔵文化財調査室　年次報告2014

## 目　次


Ⅰ．巻頭言……1

Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要……2

　1．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査……2

　2．埋蔵文化財調査室の組織と施設……5

　3．運営委員会・調査部会……6

Ⅲ．2014年度（平成26年度）事業の概要……7

　1．埋蔵文化財調査の概要……7

　　(1) 川内北地区の調査……9

　　(2) 川内南地区の調査……12

　　(3) 青葉山北地区の調査……19

　2．遺物整理作業……21

　3．年次報告・調査報告の刊行……21

　4．保存処理事業……21

　5．資料保管状況……22

　6．研究活動……22

　　(1) 受託研究・共同研究・研究協力等……22

　　(2) 学会発表等……22

　　(3) 科学研究費採択状況……22

　7．教育普及活動……24

　　(1) 非常勤講師……24

　　(2) 授業など教育活動への協力……24

　　(3) 保管資料の貸出……24

　　(4) 外部からの派遣依頼等……24

　　(5) 広報活動……25

　8．東日本大震災による被災文化財の救援活動……26

《引用・参考文献》

Ⅳ．資料……28

　1．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程……28

　2．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2014年度）……30

　3．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2014年度）……30

　4．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧……31

# Ⅰ．巻頭言

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2014を刊行いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室は、施設整備などに先立つ、構内遺跡の記録保存のための調査と、それに関連する業務を担当する、東北大学の特定事業組織です。埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』と『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』という、二種類の報告書を刊行しています。

施設整備などに伴う記録保存のための本調査については、その発掘調査報告書を、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズ名で、調査ごとに刊行しています。『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』は、埋蔵文化財調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のために、毎年度ごとに報告しています。

本年次報告では、埋蔵文化財調査室が2014年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、および調査室が実施したその他の事業について概要をとりまとめて報告いたします。川内北地区では、前年度より引き続き課外活動施設に伴う調査と、地下鉄東西線川内駅前整備事業に伴う調査の２件の本調査がありました。また、川内南地区では、前年度において実施した試掘範囲を更に広げ、国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査を実施しています。青葉山地区では、地下鉄東西線に伴う屋外環境整備が計画されていたことから、その調査の範囲を決定するための試掘調査を実施しています。

2011年３月の東日本大震災以降、震災復旧事業あるいは震災復興に関わる事業に伴う調査が続いてきました。そのため埋蔵文化財調査室は、その後の整理作業を含め、これまでに無い膨大な業務量をこなす必要にせまられております。幸い、学内外の関係機関や関係者の多大なご協力を得て、滞りなく事業を進めることができております。ここに厚くお礼申しあげるとともに、今後もご支援とご協力をお願いいたします。

埋蔵文化財調査室長　　阿子島　香

# Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要

## １．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、各キャンパスに加え多くの研究施設があり、これらの構内には多くの埋蔵文化財が存在する（表１、図１）。特に川内地区は、ほぼ全域が仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図２）。

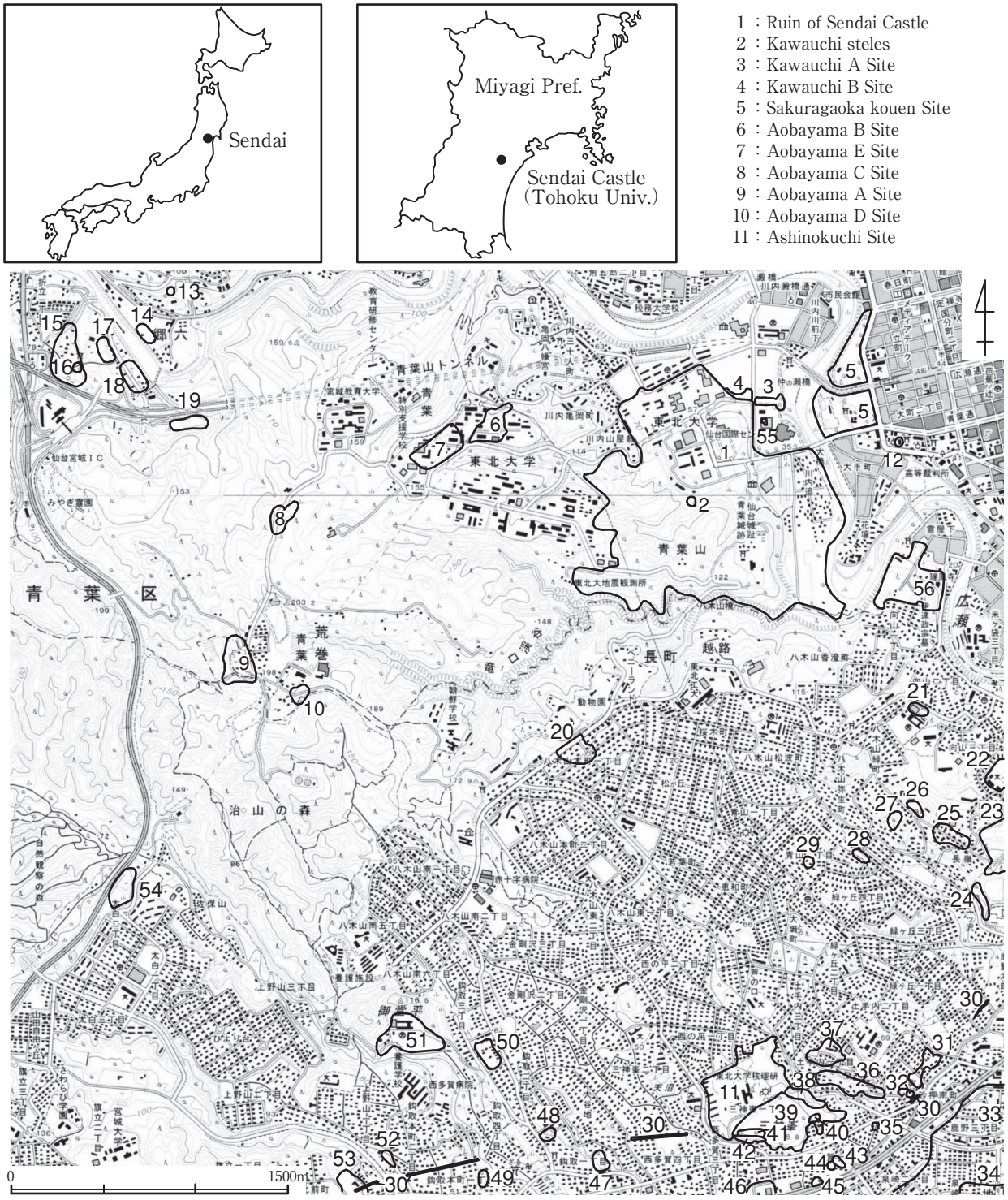
現在の日本では、これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を行う場合、文化財保護法により届出が義務づけられている。工事の掘削で遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更により遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、発掘調査を行い記録を作成することで、次善の策とする記録保存という方法が取られている。記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。学内に調査組織を設けていると、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られるという側面もある。

東北大学においても、同様の理由から、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が実施してきた。1994年度には、調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置された。2006年度には、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へ改組され、事業を引き継いでいる。

表１　東北大学構内の遺跡

| 団地名 | 所在地住所 | 遺　跡　名 | 県遺跡番号 | 時　代 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 川内１ | 仙台市青葉区<br>川内27-1･41他 | 仙台城跡 | ０１０３３ | 近世 | 二の丸地区・二の丸北方武家屋敷地区・御裏林地区 |
| | 仙台市青葉区<br>川内12-2 | 川内古碑群 | ０１３８６ | 鎌倉 | 弘安10年（1287）・正安４年（1302）他 |
| | 仙台市青葉区<br>川内41 | 川内Ｂ遺跡 | ０１５６５ | 縄文・近世 | |
| 青葉山２ | 仙台市青葉区<br>荒巻字青葉6-3 | 青葉山Ｂ遺跡 | ０１３７３ | 縄文・弥生<br>古代 | |
| | 仙台市青葉区<br>荒巻字青葉6-3 | 青葉山Ｅ遺跡 | ０１４４３ | 縄文・弥生<br>古代 | |
| 青葉山３ | 仙台市青葉区<br>荒巻字青葉468-1 | 青葉山Ｃ遺跡 | ０１４４２ | 旧石器 | |
| 富沢 | 仙台市太白区<br>三神峯一丁目101 | 芦ノ口遺跡 | ０１３１５ | 縄文・弥生<br>古墳・古代 | |
| 川渡 | 大崎市鳴子温泉<br>大口字蓬田 | 上川原遺跡 | ３６００６ | 縄文 | |
| | 大崎市鳴子温泉<br>大口字町 | 丸森遺跡 | ３６０３８ | 縄文 | |
| | 大崎市鳴子温泉<br>大口字町 | 東北大農場２・３号畑遺跡 | ３６０９８ | 縄文 | |
| | 大崎市鳴子温泉<br>大口字町西 | 町西遺跡 | ３６１０６ | 弥生 | |
| 小乗浜 | 牡鹿郡女川町<br>小乗浜 | 小乗浜Ｂ遺跡 | ７３０２１ | 縄文 | 宿舎裏の山林部分 |




1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：川内A遺跡　4：川内B遺跡　5：桜ヶ岡公園遺跡　6：青葉山B遺跡　7：青葉山E遺跡
8：青葉山C遺跡　9：青葉山A遺跡　10：青葉山D遺跡　11：芦ノ口遺跡　12：片平仙台大神宮の板碑　13：郷六大日如来の碑
14：葛岡城跡　15：郷六城跡　16：郷六建武碑　17：沼田遺跡　18：郷六御殿跡　19：郷六遺跡　20：松ケ丘遺跡
21：向山高裏遺跡　22：萩ヶ丘遺跡　23：茂ヶ崎城跡　24：二ツ沢横穴墓群　25：萩ヶ岡B遺跡　26：八木山緑町遺跡
27：二ツ沢遺跡　28：青山二丁目遺跡　29：青山二丁目B遺跡　30：杉土手（鹿除土手）　31：砂押屋敷遺跡　32：砂押古墳
33：富沢遺跡　34：泉崎浦遺跡　35：金洗沢古墳　36：土手内窯跡　37：土手内遺跡　38：土手内横穴墓群　39：三神峯遺跡
40：金山窯跡　41：三神峯古墳群　42：富沢窯跡　43：裏町東遺跡　44：裏町古墳　45：原東遺跡　46：原遺跡　47：八幡遺跡
48：後田遺跡　49：町遺跡　50：神漉山遺跡　51：御堂平遺跡　52：上野山遺跡　53：北前遺跡　54：佐保山東遺跡
55：川内C遺跡　56：経ヶ峰伊達家墓所

図1　東北大学と周辺の遺跡

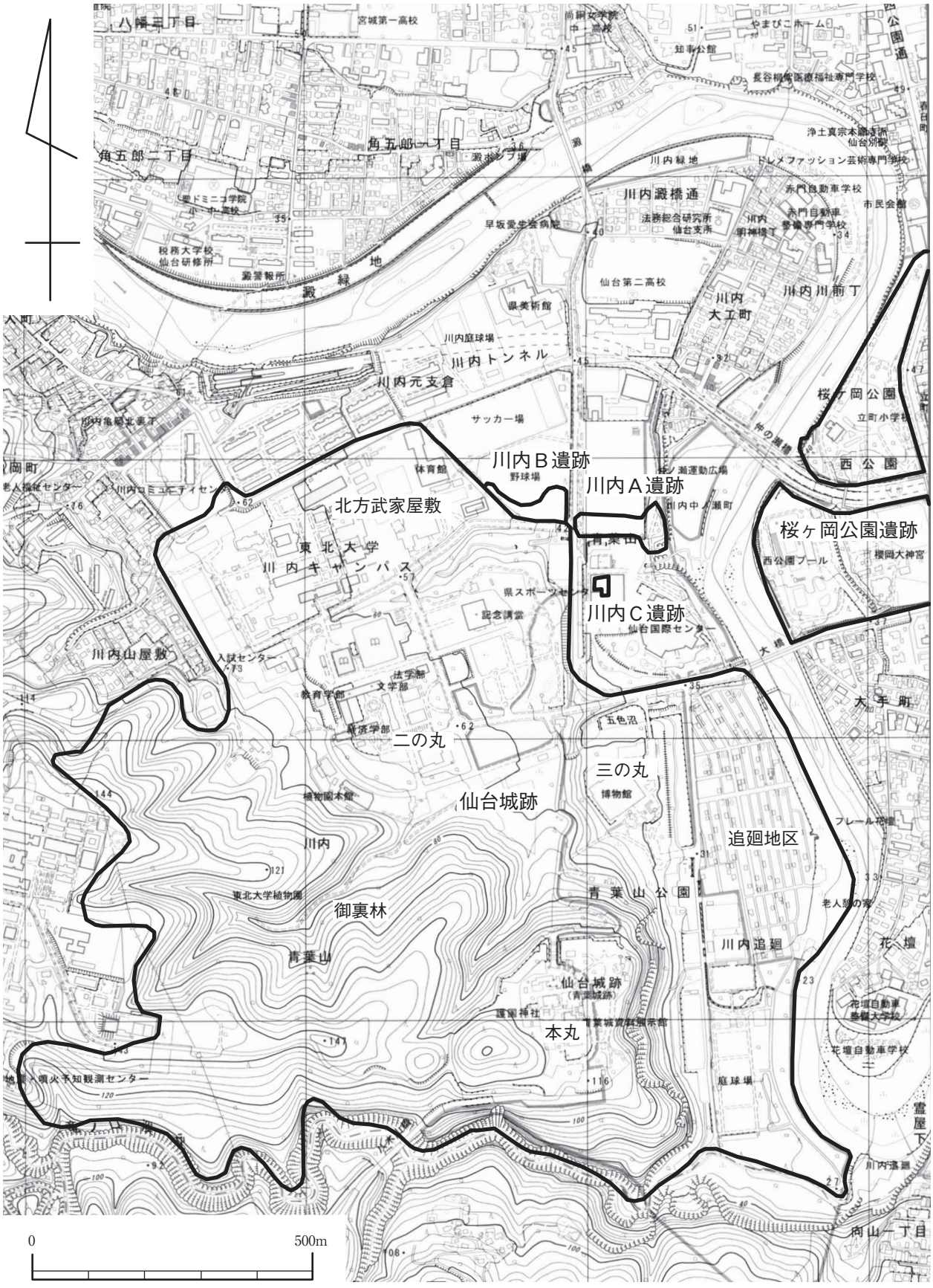



図２　仙台城と二の丸の位置

## ２．埋蔵文化財調査室の組織と施設

埋蔵文化財調査室の職員は、併任の調査室長１名、文化財調査員３名（うち特任准教授１名、専門職員２名)、事務補佐員１名（時間雇用職員)、および整理作業を担当する作業員（時間雇用職員）からなっている。通常より業務が大幅に増加したことから、2013年度と2014年度の２ヶ年間の予定で、准職員（技術補佐員）１名を増員して対処することとした。必要となる人件費の財源は、発掘調査経費の人件費を利用することとなった。2013年度に准職員（技術補佐員）として雇用していた職員が、地方公共団体の正規職員として採用されたことから、2014年度は新たに時間雇用職員（技能補佐員）を、採用することとした。2014年度の埋蔵文化財調査室の職員は、これ以外に、発掘調査を実施している期間は、発掘調査に従事する作業員（時間雇用職員）を雇用している。

埋蔵文化財調査室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員１名の人件費と、光熱水料、自動車維持費、消耗品費などである。

発掘調査については、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。

調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員の賃金も、ここから支弁されている。

埋蔵文化財調査室の主要な業務は、調査委員会の設置以降、片平地区の生命科学研究科３階の一画を使用して行なってきたが、生命科学研究科建物の整備工事に伴い、仮施設での業務を経て、2011年２月に施設部などが入っている本部棟４の１階に移転した。本部棟４に移転した後の部屋面積は191.5㎡で、これに廊下を仕切って収蔵庫としている部分20.5㎡が加わる。室長室兼事務室、調査員室、作業室、予備室、収蔵庫からなっている。本部棟４内にある収蔵庫は、出土遺物の中でも、報告書に図示され、借用や調査依頼の多い資料については保管している。それ以外の遺物については、保存処理作業棟南側に置かれている収蔵庫において保管している。作業室は、実測などの作業をはじめとする整理作業を行う部屋で、報告書などの文献を保管している書架も置いている。予備室は、将来的は展示ケースなどを整備し、構内遺跡の発掘調査成果を展示し紹介するコーナーとする予定である。

保存処理の作業は、2001年度に生命科学研究科の南側に設置された作業棟（プレハブ平屋建・79㎡）を利用している。また、ガレージの一部の34㎡を使用しており、調査室用の公用自動車を保管している他、保存処理用の大型水槽を設置している。発掘調査用機材も、ここで保管している。2003年度には、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ２階建・202㎡）が作業棟の南側に設置され、専用の保管場所が確保された。

2011年３月11日に発生した東日本大震災は、東北大学にも多大な被害をもたらし、埋蔵文化財調査室でも被害が生じたが、全般に被害程度は軽微で、早期に復旧することができた。家具類の転倒防止措置や、棚への転落防止ベルト（タナガード）の設置が、被害の軽減に極めて効果的であった。ただし川内南地区にあった発掘調査用の資材倉庫（プレハブ平屋建・58㎡）は、老朽化していたこともあり、2012年度に取り壊して撤去した。

表２　2014年度埋蔵文化財調査室職員

| 職　名 | | 氏　名　等 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 調査室長 | 文学研究科教授 | 阿子島　香 | 併任 |
| 文化財調査員 | 特任准教授 | 藤沢　敦 | |
| | 専門職員 | 柴田　恵子 | |
| | 専門職員 | 菅野　智則 | |
| 技能補佐員 | 時間雇用職員 | 田中　則和 | 発掘調査経費を財源とした職員 |
| 事務補佐員 | 時間雇用職員 | 久我　奈々江 | 埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員 |
| 整理作業員 | 時間雇用職員 | ４名（通年４名） | 全学的基盤経費を財源とした職員 |

## ３．運営委員会・調査部会

東北大学埋蔵文化財調査室では、運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されており、委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2014年度（平成26年度）は、運営委員会を２回実施した。調査部会は、開催していない。運営委員会の開催月日と議事内容は、以下の通りである。

４月16日開催の運営委員会は、年間の事業計画・予算等の基本的事項を審議するものである。２月13日開催の運営委員会は、埋蔵文化財調査室の特任准教授が異動することに伴い、特任准教授と文化財調査員を補充する人事に関わって開催したものである。あわせて、学校教育法改正に伴い全学的に教授会・運営委員会等の規定の見直しが進められていることに伴い、調査室の規定改正について審議したものである。

埋蔵文化財調査室運営委員会（於：施設部会議室）

４月16日　審議事項　（１）埋蔵文化財調査室長について
（２）平成25年度埋蔵文化財調査結果及び平成26年度の埋蔵文化財調査計画について
（３）平成25年度調査室運営費決算及び平成26年度調査室運営費予算について
（４）平成25年度の整理作業結果及び平成26年度の整理作業計画について
（５）専門分野の委員の交代について
（６）その他
報告事項　（１）川内萩ホール展示スペース常設展示について
（２）その他

埋蔵文化財調査室運営委員会（於：施設部会議室）

２月13日　審議事項　（１）特任准教授について
（２）文化財調査員について
（３）埋蔵文化財調査室規程の改正について
（４）専門分野の委員の交代について
（５）その他
報告事項　（１）その他

# Ⅲ．2014年度（平成26年度）事業の概要

## １．埋蔵文化財調査の概要

2014年度は、記録保存のための本調査２件、確認調査２件、立会調査12件を実施した（表３）。

通常の立会調査は、2009年度途中から、仙台市教育委員会の指示に従い、工事日程を事前に仙台市教育委員会に提出した上で、当調査室が立会調査を行っている。

2014年度は、４月から国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査（仙台城跡二の丸地区第18地点：NM18）を実施した（Ⅱ次調査）。前年度のⅠ次調査では、５ヶ所全ての調査区において、大学建物基礎、米軍共同溝、第二師団（以後、師団と略する）基礎、現代の埋設管などで破壊されている部分以外は、江戸時代の地層は残されていることが判明した。この調査結果を踏まえ、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会と東北大学の間で協議が行われ、対応策が検討された。建築工法についても検討が行われ、既存建物の基礎杭を再利用し、新たな掘削が発生しない特殊な工法が採用できることとなった。今回の事業が、東日本大震災の復興事業の一環として、震災で被害を受けた建物を建て替える形で行われること、埋蔵文化財への影響を最小限に留める工事内容であることから、今回の建築はやむを得ないとの判断となった。ただし、恒久的な施設が建設されるため、必要な範囲で確認調査を実施し、遺構の残存状況などを確認することとなった。

この調査と並行して、川内北地区における課外活動施設新営に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15）の調査を実施した。本地点の調査は、2012年度から開始されたが、震災復旧事業、震災復興事業に伴う調査を先行して進める必要があったため、たびたび中断を余儀なくされた。この地点では、多種多様な遺構やそれに伴う多くの遺物が出土し、さらに調査面積も広いこともあり、2015年１月まで調査が継続した。11月からは、中断していた地下鉄東西線川内駅前整備に伴う武家屋敷地区第14地点（BK14）の調査も再開した。この調査は、2015年度まで継続して実施している。

また、青葉山地区に所在する青葉山Ｅ遺跡において、2015年度に地下鉄東西線青葉山駅と関連する屋外環境整備（駅前広場）が計画された。その調査範囲を決定するため、2015年３月の３日間において遺跡範囲に関する確認調査を行った。その結果、工事予定地のほぼ全域で、遺物包含層が残存していることが明らかとなった。そのため、工事によって遺物包含層が掘削される範囲は、全面で記録保存のための調査が必要となった。

表３　2014年度調査概要表

| 調査の種　類 | 地区 | 調査地点（略号） | 原　　因 | 調査期間 | 面積（㎡） | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 本調査 | 川内北 | 川内課外活動施設北東側（BK15） | （川内１）課外活動施設新営工事 | 4/1～2015/1/26（前年度より継続） | 1,503 | 近世 |
| | 川内北 | マルチメディア教育棟西側（BK14） | （川内１）川内駅前広場整備工事 | 11/4～（次年度に継続） | 398 | 近世 |
| 確認調査 | 川内南 | 文系大講義棟A・B周辺（NM18） | （川内１）国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査 | 調査4/1～6/30、立会5/8～15、7/3･4、7/21～8/6、8/22～25、2015/2/24･27、3/5 | 668 | 近世 |
| | 青葉山北 | 青葉山体育館東側（AOE10） | （青葉山２）屋外環境整備（駅前広場） | 2015/3/16～18 | 70 | 縄文 |
| 立会調査 | 川内南 | 附属図書館1号館周辺（2014-1） | （川内１）附属図書館１号館改修工事 | 6/4、8/20･25･29（前年度より継続） | － | － |
| | 川内北 | 国際文化系総合研究棟周辺（2014-2） | （川内１）国際文科系総合研究棟改修工事 | 1/31、5/31、7/6～18（前年度より継続） | － | － |
| | 川内南 | 文科系合同研究棟周辺（2014-3） | （川内１）文科系合同研究棟改修工事 | 2/19、7/5･8（前年度より継続） | － | － |
| | 川内南 | 法学研究棟北側（2014-4） | （川内１）法学研究棟汚水管改修工事 | 8/29 | － | － |
| | 川内南 | 市道「川内1号線」歩道（2014-5） | （川内１）サクラ植替え工事 | 10/27･28、12/15 | － | － |
| | 川内北 | 保育園庭内（2014-6） | （川内１）枯損松伐採除根工事 | 11/9 | － | － |
| | 川内南 | 萩ホール東側（2014-7） | （川内１）萩ホール遊歩道整備工事 | 12/15 | － | － |
| | 青葉山北 | 青葉山・川内キャンパス間（2014-8） | （青葉山１）遊歩道法面保護工事 | 2015/1/9 | － | － |
| | 川内北 | 教育研究基盤支援棟4北側（2014-9） | （川内１）学生相談・特別支援センター改修その他工事 | 2015/1/19 | － | － |
| | 川内北 | 管理棟東側（2014-10） | （川内１）学生支援センター新営その他工事 | 2015/1/23 | － | － |
| | 川内南 | 市道「川内1号線」歩道（2014-11） | （川内１）市道「川内1号線」歩道舗装打替工事 | 2015/2/18 | － | － |
| | 川内南 | 文学部研究棟北側（2014-12） | （川内１）文学部研究棟前屋外環境整備工事 | 2015/3/11 | － | － |

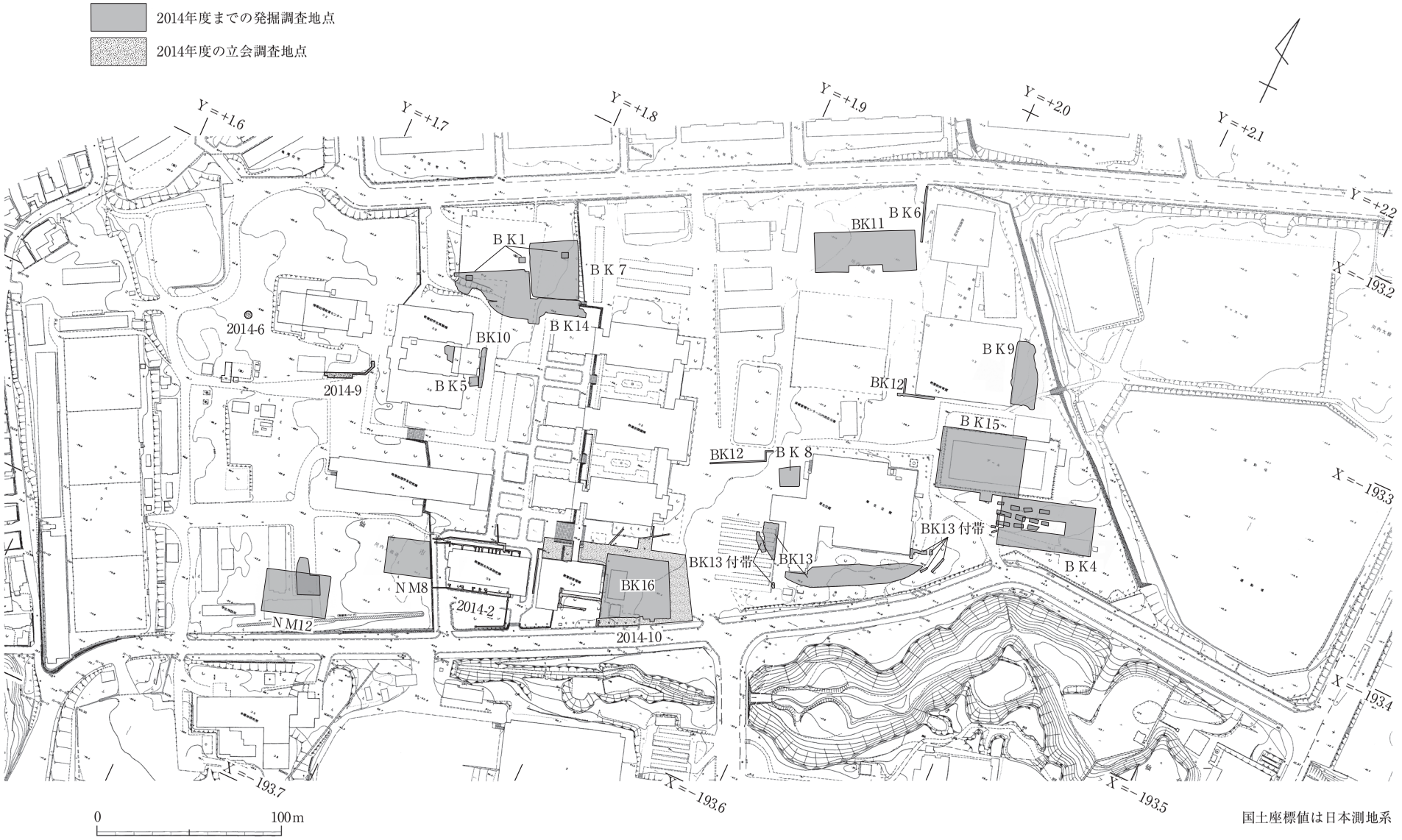



図３　川内北地区調査地点

（1）川内北地区の調査

川内北地区では、本調査２件、立会調査４件を実施した（図３）。

ａ．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15・課外活動施設新営に伴う調査）

・調査の経緯と経過

屋内プールが入る課外活動施設を新設する工事に伴う調査である。東日本大震災によって、片平地区などの課外活動施設が被害を受け、一部は使用できなくなった。この状況の中で、従来からの懸案であった、片平地区の老朽化した課外活動施設を川内地区へ移転するため、学内予算を財源に新たな施設を建設することとなった。新施設建設の方針が、2011年度末になって急遽具体化したため、2012年５月から急遽調査を開始した。ただし、震災復旧のための平成23年度補正予算による事業に伴う調査を最優先することとしたため、中断をはさみながら調査を実施してきた。その2013年度までの経過については、『年次報告』2013にてまとめた。

2013年度の12月から2014年度にかけて、調査区北側に位置する沢跡や池跡を含む遺構群の調査を行った。その後、仙台城跡二の丸地区第18地点の調査に専念するため一時中断となり、６月から再開することとなった。再開後は、順次北側から遺構を精査し、一部を残しつつも、10月18日には現地説明会を実施した。この現地説明会には100人程が参加し、盛況であった。現地説明会終了後は、残された区画の精査を再開し、南側張出し部以外の調査を終え、12月19日に空撮測量を行った。南側張出し部は、建物本体工事区域に接する電気配管埋設工事区域の一部であり、今回合わせて調査を実施することとした区画である。この南側張出し部では、遺構などが密集していたため時間を必要としたが、2015年１月26日にはすべての調査を終了させた。また、建物の外構整備関連に伴う調査については、2015年度に必要に応じて実施する予定である。

・基本層序

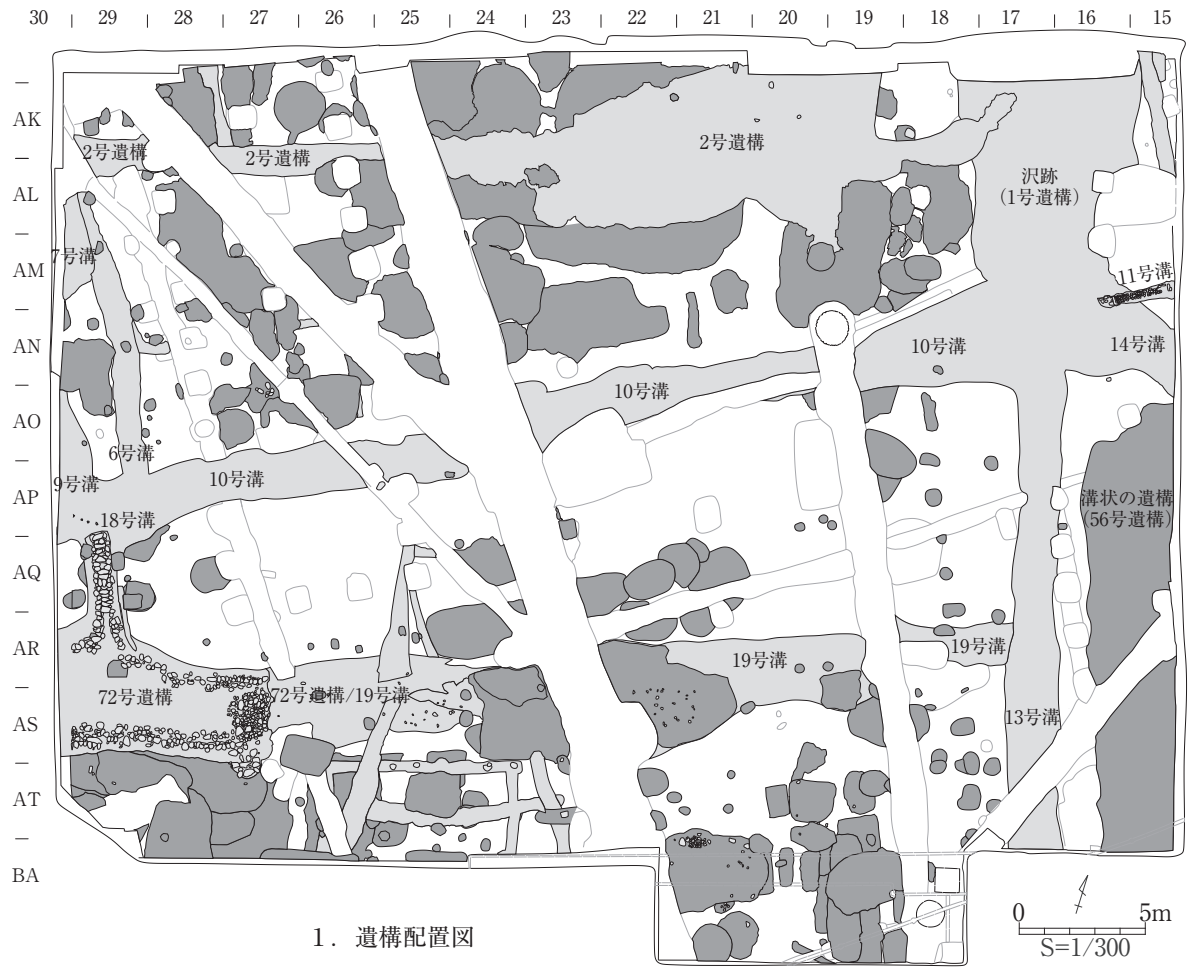
基本層序は、南西側に隣接する北方武家屋敷地区第４地点（BK４）と、おおむね共通する。１層は師団期以降、現代に至る時期の整地層・表土層である。２層・３層は、師団期に施設を造成した際の整地層と考えられる。師団期の大規模な礎石建物は、２層上面段階で構築されている。４層は、明治維新後に屋敷が取り壊された後の、整地層や表土層と考えられる。第４地点では、この４層上面で畝状遺構が確認され、畑として利用されていたことが判明した。第４地点の西側から、今回の調査地点の南東側にかけては、荷車の轍と考えられる細長い落ち込みが多数発見され、通路として利用されていたと考えられる。５層は、北側の地山面の高さが低い区域に分布する整地層である。屋敷取り壊し後に、北側の一段低い部分を埋めて、ほぼ平坦にしたものと考えられる。５層の下位が地山層となる。５層より上の整地層は、いずれも明治時代のものと考えられる。江戸時代の遺構は、全て地山面で検出された。

・調査成果（図４）

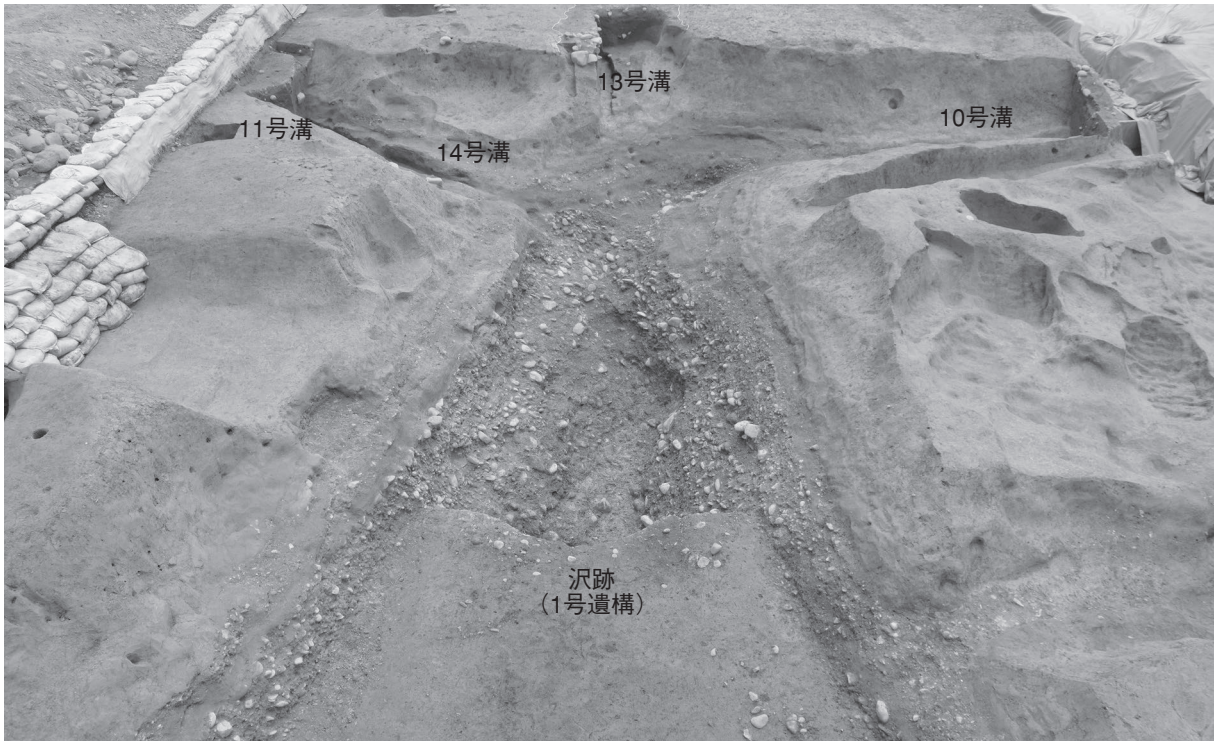
調査区の北東隅には、深い沢状の遺構がある（１号遺構）。北側へ向かって深くなっており、北東側の段丘崖の下へ流れていく沢と考えられる。この沢に合流する形で、調査区を西から東へ横断する溝（10号溝）が確認された。18世紀から19世紀にかけての時期と思われる。この溝をはさんで北側の標高が低くなることから、ここが南北の屋敷の境と考えられる。この溝には、北側・南側の両方から溝や暗渠が合流しており、主要な排水路として利用されたと考えられる。

調査区の東端には溝状遺構（56号遺構）が南北に伸びており、溝状と方形などの掘り込みが連続する。この溝状遺構は、南東側に隣接する第４地点の調査区でも続きが発見されており、これをはさんで東側の標高が低くなることから、ここが東西の屋敷の境と考えられる。時期は18世紀が中心で、19世紀まで使われた可能性がある。

溝状遺構の西側には、南北に伸びる溝（13号溝）と掘立柱列が並ぶ。第４地点の調査区では、溝が埋まってから柱列が造られたことが判明している。13号溝は、17世紀初頭に掘られた可能性があり、17世紀の内には埋没したと考えられ、古い時期の区画溝と思われる。掘立柱列は、屋敷を区画する塀と考えられる。13号溝には、東西



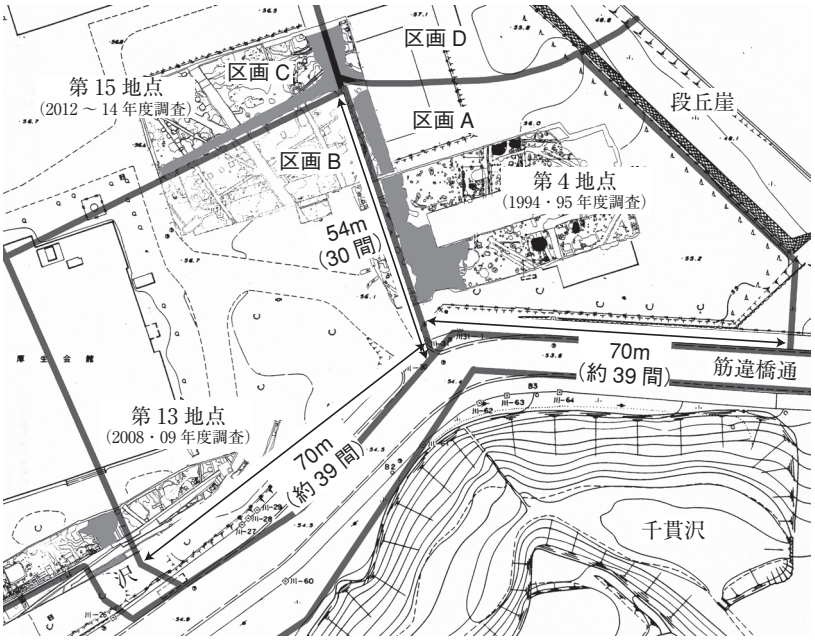

1．遺構配置図




2．1号遺構と接続する溝（北から）

図4　武家屋敷地区第15地点調査状況

1．天明６～寛政元年（1786～89）仙台城下絵図




2．調査区と屋敷区画の復元（縮尺 1/1500）

図５　武家屋敷地区第15地点調査区と絵図との対比

方向に伸びる19号溝が接続する。13号溝が一部埋まった段階で造られている。古い段階の、東西方向の区画溝と考えられる。この19号溝が埋まった後、ほぼ同じ場所を利用する形で、遺構が連続して存在する。西側の72号遺構は、ほぼ長方形の大規模な遺構で、水の処理に関わるものと考えられる。一部が埋没した後に、石組の護岸を行っている。この72号遺構は、石組暗渠の18号溝を介して、10号溝と接続している。

また、東西の区画溝である10号溝から北側では、円形や不整形をした浅い掘り込みが連続して検出された。何回か造り替えられ、最後には東西に溝が掘られている。形状から、庭園の池であった可能性がある。

今回の調査結果と過去の調査成果から、調査区の東北隅に近い部分が、４つの区画の屋敷地の境であったと考えられる（図５）。仙台城下の武家屋敷では、道路に面した表側は塀をめぐらすが、それ以外では生け垣で屋敷境を区画していたとされる。今回の調査でも、屋敷境と考えられる塀跡は、１列しか発見されていない。南北の屋敷境と考えられる10号溝の周囲には、遺構のほとんどみられない区域が帯状に東西に伸びる。特に南側の19号溝との間は、遺構が極めて少ない。このような部分には、樹木が植えられ、生け垣とされていた可能性がある。

そして、城下絵図のＡ区画とＢ区画の、二つの屋敷地を復元することができた（図５－２）。二の丸地区と武家屋敷地区との境に流れる千貫沢は、江戸時代から大きく変わっていないと見られることから、沢の北側に沿って道路（筋違橋通）が伸びていたと推定される。南西側の厚生会館増築に伴う北方武家屋敷地区第13地点（BK13）の調査では、千貫沢から分岐して、北側に入り込む沢が検出された。この沢は、Ｂ区画の西端に描かれた沢に相当すると考えられる。東側のグランドとの境の段差は、段丘崖である。Ａ区画の東側は、この段丘崖が屋敷境となっていたと考えられる。道路に面した間口は、両方とも約70m、二つの区画の境の部分での奥行きは54mとなる。仙台城下の屋敷の計測には、１間が６尺（約1.8m）の「仙台屋敷竿」が使用されていた。今回復元できた屋敷の間口は、約39間、奥行きは30間となる。南側の道路の幅をどのように想定するかによって、この数値は若干の変動が予想されるが、基準に照らし合わせると、禄高が800～1000石の家臣の屋敷地が、「間口40間、奥行30間」とされているのに相当する。これは、特別に身分の高い別格と言える家臣の屋敷地を除くと、最大規模のものとなる。面積は若干変化するが、おおむね3,000㎡を越え、1,000坪ほどの広さであったと考えられる。今後、遺構の変遷を考古学的に検討することにより、屋敷地の利用の仕方について考察していきたい。

ｂ．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14・川内駅前広場整備工事に伴う調査）

・調査の経緯と経過

仙台市高速鉄道（地下鉄）東西線の川内駅の、駅前広場を整備する工事に伴う調査である。本調査地点におけるこれまでの経過については、『年次報告』2012にてまとめた。

2014年度には、2015年３月から残りの５～７区を同時に調査することとした。調査した合計面積は445.5㎡である。３月初めの重機掘削の際に、７区南側と東側に大規模な撹乱が認められたことから、その部分については調査しないこととした。2014年度中は撹乱掘り上げなどのみであり、2015年度から精査を行うこととした。そのため、この調査の概要については、『年次報告』2015に掲載することとする。

ｃ．立会調査

・国際文科系総合研究棟改修工事（2014－2）

国際文化系総合研究棟の改修工事である。前年度からの継続の工事となり、その詳細な経緯については『年次報告2013』にまとめてある。新設外壁は現在の建物工事の際に掘削されており、問題はなかった。その他の電気や配水などの管類については、基本的には既存管の入れ替えであり、問題はなかった。

・枯損松伐採除根工事（2014－6）

学内保育施設「川内けやき保育園」園庭にあるアカマツが松くい虫により枯死し、園児の安全を確保するため、その伐採・抜根が必要となった。この抜根に伴う掘削に立会したが､全て撹乱された土壌であり問題はなかった。

・学生相談・特別支援センター改修その他工事（2014－9）

川内北キャンパス内に身体障害や発達障害を有する学生が利用する施設（トイレ）を新設する工事である。給排水管の箇所に掘削が発生したが、全て撹乱された土壌であったことから問題はなかった

・学生支援センター新営その他工事（2014－10）

学生支援センター周辺における外構工事である。この地点は、前年度に調査した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）の周囲に該当する。給排水、電気、ガスなどの各種の配管工事がなされたが、撹乱された土壌の範囲内に収まり、問題はなかった。

（2）川内南地区の調査

川内南地区では、確認調査１件、立会調査７件を実施した（図６）。

ａ．仙台城跡二の丸地区第18地点（NM18・国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査）

・調査の経緯と経過

文系大講義棟を建て替える形で、国際文化系教育研究拠点施設を整備する計画に伴う確認調査である。前年度に引き続いた調査となる。これまでの経緯やⅠ次調査の成果については、『年次報告』2013にてまとめてある。このⅠ次調査の調査結果を踏まえ、2014年度は、必要な範囲で確認調査を実施し、遺構の残存状況などを確認することとなった。既存建物の床コンクリートスラブは、基礎杭を調べて基礎を作り直す部分以外は、撤去しない計画であった。そのため、建物解体後に地表面が露出する範囲は、南北の講義棟内の階段教室で、階段部分が土盛りで構築されている部分と、中庭とその東西両側程度である。これらの調査可能な範囲の中で、重要と考えられる範囲（１Ｂ区、２Ｂ区、６Ａ・Ｂ区、７Ａ～Ｃ区：668㎡）について、４月から３ヶ月間の確認調査を実施することとした（図７）。

当初は、上屋建物の解体が終了していた７Ａ・７Ｂ区の調査から始め、４月23日には空撮測量を行い、この区の調査を終了させた。４月25日には、山砂を全面に敷き詰めた上で埋め戻しを完了させた。なお、ほかの調査区においても、同様に山砂で保護してから埋め戻している。調査終了後、この区域の基礎杭周辺の基礎の撤去が始

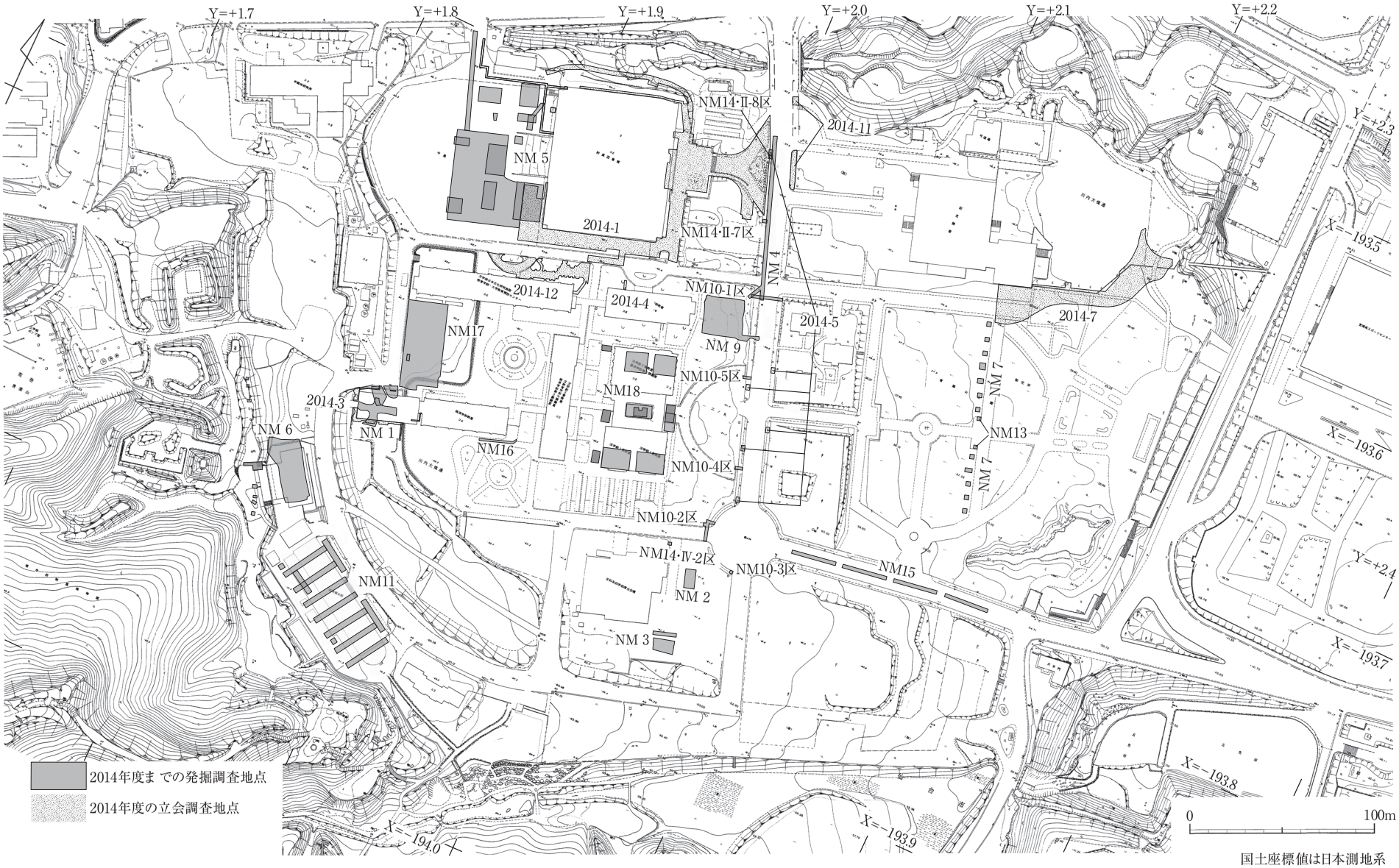



図６　川内南地区調査地点

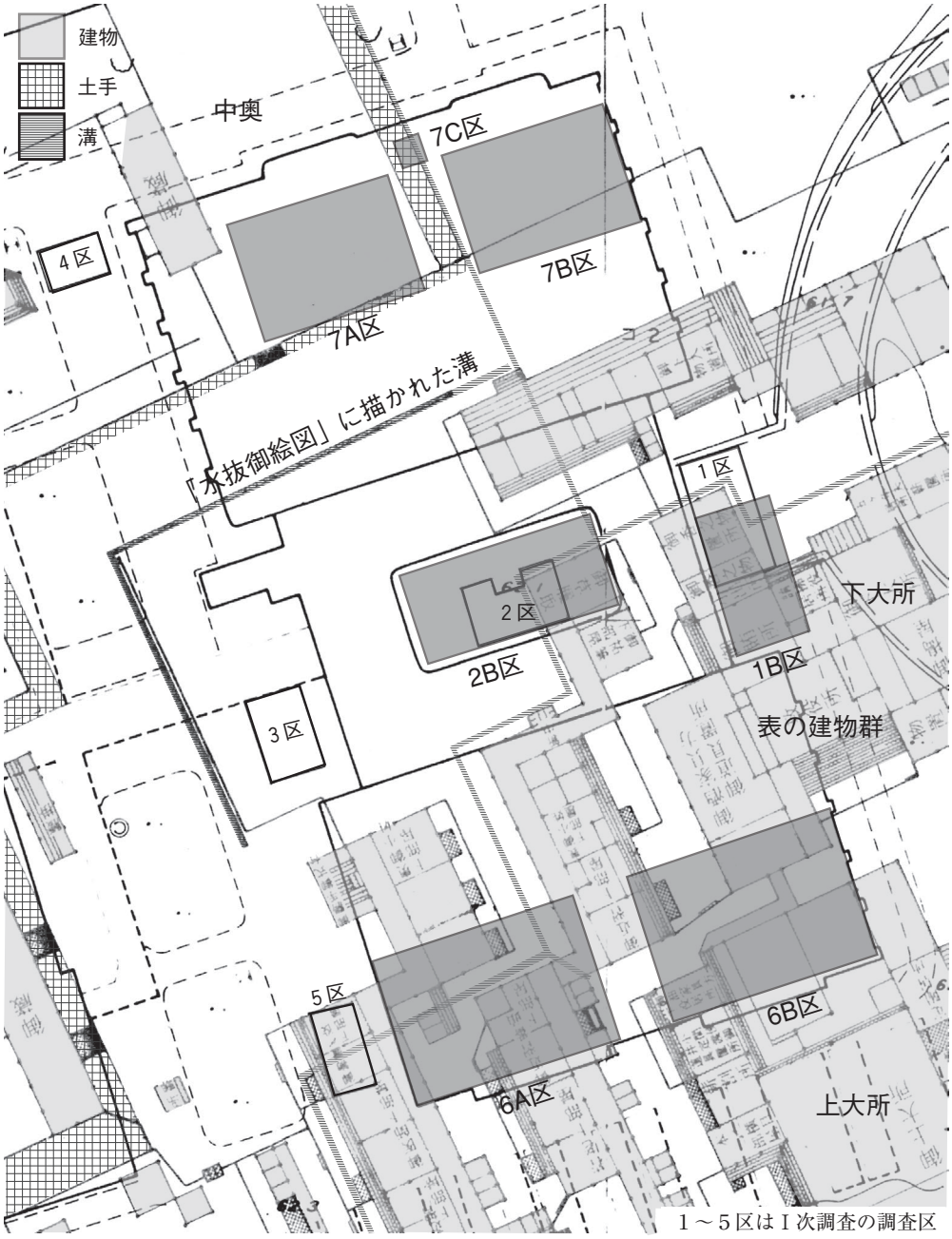


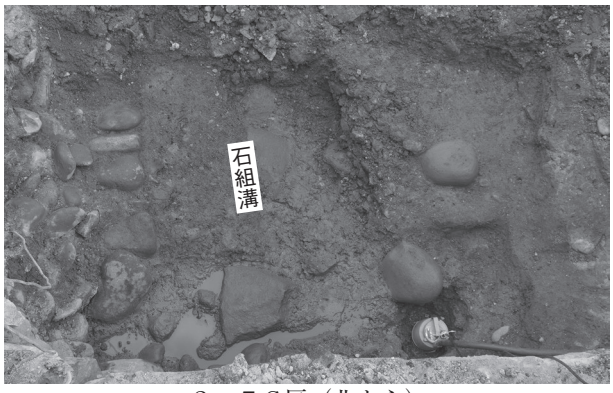

図７　二の丸地区第18地点調査区と絵図との対比（縮尺1/600）

まった。その際に７Ａ区と７Ｂ区の間から、石組溝が確認された。これを７Ｃ区として急遽調査を行った。５月からは、ほかの４地点の調査を開始した。上屋建物の解体が済んでいた１Ｂ区と２Ｂ区の調査を優先させ、６月５日には空撮測量を実施し、調査を終了させた。この空撮時の６Ａ区と６Ｂ区に関しては、撹乱を概ね除去し、主要な遺構を確認した段階であった。そして、この時点で、今回の調査地点における遺跡内容の概要の大部分が把握できたことから、６月14日に現地説明会を実施した。この説明会には120名程の参加者があり、仙台城への関心の高さが窺えた。現地説明会終了後、６Ａ区と６Ｂ区の精査を引き続き実施し、６月20日に空撮測量を実施して、全ての調査区の調査を終了した。

・基本層序

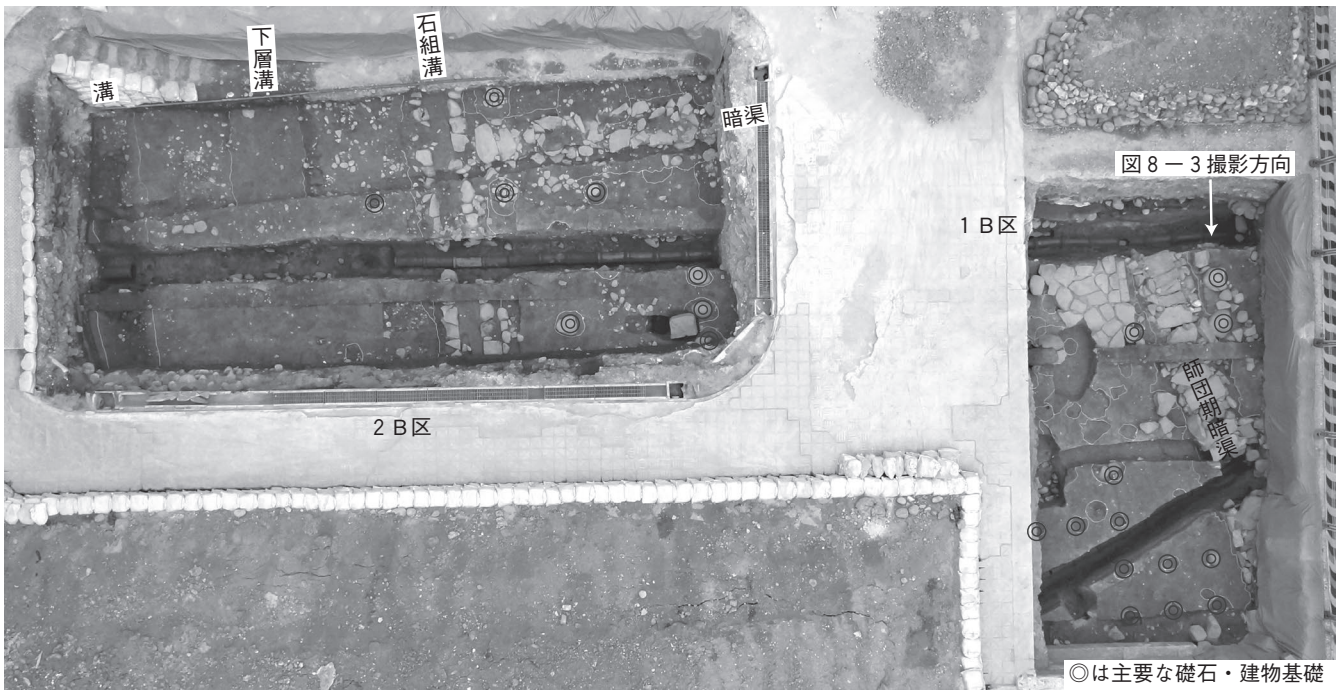
ごく一部を除くと江戸時代の地層は掘削しておらず、明治時代以降の地層を掘削したのみである。地点によっ

１．７Ａ区と７Ｂ区（上が北）



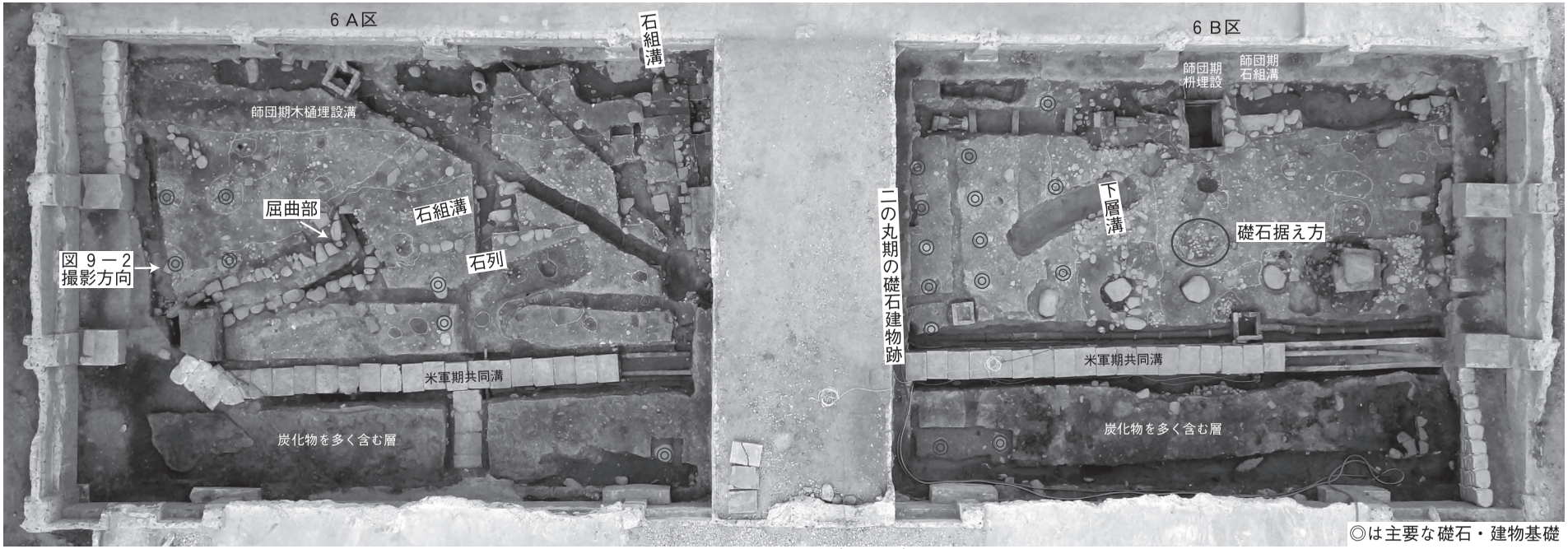

２．７Ｃ区（北から）

３．１Ｂ区北側撹乱部断面（北から）




４．１Ｂ区と２Ｂ区（上が北）

図８　二の丸地区第18地点調査状況（1）




1．６A区と６B区（上が北）

2．６A区基礎断面（西から）

3．６B区礎石並び（北から）

図９　二の丸地区第18地点調査状況（2）

ては、厚く堆積した炭化物や焼土を多く含む層が認められた。これまでに判明している二の丸が焼失した1882（明治15）年の火災に伴うものと考えられる。

・調査成果

７Ａ区・７Ｂ区：表土より撹乱を除去する途中で多くの炭化物を含む層が認められた（図８－１左）。この層を部分的に掘り下げ、その下の遺構を確認した。炭化物を多く含む層の下の面では、師団期の礎石や轍の痕跡を確認した。それより以下については、多くの整地層のほか、撹乱部の断面で土坑などの遺構を確認した。この区においても、江戸期の面が良好に残っていることが把握できた。７Ｂ区では、鍵となる炭化物を多く含む層を、７Ａ区よりかなり低い位置で検出した（図８－１右）。中央部にトレンチを設定し、その下層についても確認し、それ以前の土層が遺存していることを確認した。

Ｉ次調査では、北東に位置する４区（図７）のみが、ほかの調査区に比べ江戸期に相当する地層面の標高が高かった。このことから、絵図で「土手」として表現されているものが、「表」と「中奥」を区切る段差を示すものと推定した。今回の７Ａ・Ｂ区の調査では、「土手」そのものは発見されなかったが、７Ａ区の二の丸期の地表面の標高が、７Ｂ区より60cmほど高いことが判明した。その結果から、７Ａ区が一段高い「中奥」にあたると考えられる。また、７Ｃ区では、既存建物の基礎撤去の際に石組溝が発見された（図８－２）。これは、「土手」の下に造られた溝と考えられる。

１Ｂ区・２Ｂ区：東西方向に土管埋設による破壊があり、その北側は師団期に削平されている。また、１Ｂ区に南北方向に走る暗渠は、師団期のものである。１Ｂ区では、礎石建物跡と、その内部に敷かれた石敷きなどが発見された（図８－４右）。石敷きの石や礎石を取り去った跡と思われるものも検出した。建物の構造などは明確ではないが、同じ建物の礎石や石敷きと考えられる。また、土管などで破壊された部分における断面部にて、複数の整地層を明瞭に確認することができた。その断面では、大きな川原石を詰めた、礎石の据え方と思われるものが確認された（図８－３）。二の丸造営時に若林城から移設された「大所」の礎石据え方の可能性もある。

２Ｂ区では、南北方向に延びる石組溝、そこから東に分岐する暗渠、礎石建物跡などが発見された（図８－４左）。削平された部分では、下層のより古い時期の溝跡も発見されている。礎石建物跡の全体の様相は判明しないが、１Ｂ区の礎石建物とは、柱間寸法が整った距離にならないことから、別の建物になると考えられる。

６Ａ区・６Ｂ区：調査区南よりのところに米軍共同溝が東西に走る（図９－１）。北端では、木樋を埋設した溝が東西に伸びており、６Ｂ区にて板を長方形に組んだ枡状の施設に接続し、さらに石組溝が東側に伸びる。木樋・枡・石組溝は一連の遺構と考えられ、師団期のものと見られる。また、６Ｂ区の米軍共同溝の北側には、師団期の巨大な建物基礎が並ぶ。

６Ａ区では、北東隅に南北方向の石組溝が検出されており、途中で西側へ分岐する（図９－１左）。分岐した石組溝は、途中で小さく屈曲して向きを変えながら西へ延びる。石組溝の南東側に礎石建物跡が確認され、石組溝との間に石列が見られる。石組溝の北西側にも、礎石の据え方が確認されるが、柱間の寸法が整った間隔とならず、建物の展開は不明である（図９－２）。

６Ｂ区の西よりの部分では、江戸期の礎石建物跡が確認された（図９－３）。東端は１間間隔で礎石を据えるために玉石を詰めた据え方が確認されたが、礎石は取り去られている。建物内部の柱や床束を支える礎石の様子が、良好に判明した。この礎石建物の西側には、建物より古い南北方向に伸びる石組溝がある（図９－１右）。また、中央部には、規模の大きな礎石の据え方が確認されており、南側に続いていくと考えられるが、建物全体の状況は不明である。

まとめ：今回の調査地点は、絵図との対比から二の丸の「表」の北側から「中奥」にさしかかる部分で、二の丸の「表」の「上大所」や「下大所」付近に相当すると考えられる。二の丸の絵図を現状と対比させた位置関係は、これまでも調査成果から推定してきた。今回の調査では、「表」と「中奥」を区切る土手の位置、建物の間を通

る石組溝などが、ほぼ推定していた位置で発見された。礎石建物跡も、おおむね絵図に記載された建物に対応すると思われる。しかし、各種遺構の存在が絵図と正確に一致するわけではない。絵図によっても、建物の大きさや位置が微妙に異なって表現されている場合もあり、今後詳細な検討を行って、発見された遺構と絵図の記載との対応関係を慎重に検討する予定である。

また、二の丸の表の礎石建物がまとまって発見されたのは、1983年の第２地点（NM２：『年報』１）の調査以来のこととなる。二の丸地区の建物群の実態解明の点で、貴重な成果となった。二の丸地区では、既存建物の基礎で壊された部分以外は、明治期以降の建物が建っていた範囲でも良好に江戸期の遺構面が保存されていることが判明した。

ｂ．立会調査

・附属図書館１号館改修工事（2014－1）

前年度から続く図書館１号館の全面的な改修工事である。その詳細な経緯については『年次報告』2013にまとめてある。前年度と同様に掘削箇所に関しては、既に掘削された範囲内に収まるもので、とくに問題はなかった。

・文科系合同研究棟改修工事（2014－3）

老朽化した文化系合同研究棟の改修に伴う工事である。この工事も前年度からの継続であり、その詳細な経緯については『年次報告』2013にまとめてある。現在の建物には、断熱材が施されていなかったことから、地下躯体部に防水工事が必要となった。この工事では、２m程の掘削がなされたが、現在の建物の建設工事により、すでに掘削されていた箇所であるので、とくに問題はなかった。また、電気・水道の配管については既存管の入れ替えとし、既存の掘削範囲に収まるものであったことから、問題はなかった。

・法学研究棟汚水管改修工事（2014－4）

頻繁に詰まっていた汚水管の調査がなされ、その結果、汚水管のズレ、破損、破損箇所からの木根の進入が確認された。そのため、既存管を撤去し、新たに管を入れ替える工事が必要となった。この工事は、基本的に既存管との入れ替えであり、既存の掘削範囲に収まるものであったことから、とくに問題はなかった。

・サクラ植替え工事（2014－5）

川内南キャンパス内を横断する市道「川内１号線」の歩道街路樹（桜並木）は、1961（昭和36）年に記念植樹されたものであるが、枯死や保全上の理由から伐採され、根株のみになっているものが多数認められていた。そこで景観維持のため、既存の植樹桝を利用し、その中の土壌を入れ替えた上で、新たに若木を植えることとなった。この全ての地点において撹乱を受けており、問題はなかった。

・萩ホール遊歩道整備工事（2014－7）

萩ホールと仙台国際センターを結ぶ遊歩道の整備に伴う工事である。この工事は､現状地盤の上に盛土を行い、その上に透水性舗装や自然石貼り、芝張り、外灯設置などを行うもので、とくに問題はなかった。

・市道「川内１号線」歩道舗装打替工事（2014－11）

市道「川内１号線」の北東側の歩道において、インターロッキングブロックが、木根などのため盛り上がり段差が生じた箇所が認められていた。本工事は、該当箇所のブロックを外した後に、木根の除去、アスファルト弁柄舗装を施すものである。基本的には現在のブロックなどとの入れ替えであり、新たに生じる新規掘削は30cm程であった。今回の掘削範囲内は、すでに撹乱を受けており、問題はなかった。

・文学部研究棟前屋外環境整備工事（2014－12）

川内キャンパス全体の環境整備に合わせ、文学部の玄関としての環境整備を行う工事である。工事内容としては、ロータリー部の拡幅、スロープの新規設置などが計画されていた。それらの箇所は、現在の建物建設の際の掘削範囲に収まることが現地で確認されたことから、問題はなかった。

### (3) 青葉山北地区の調査

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、確認調査１件、立会調査１件を実施した（図11）。

**ａ．青葉山Ｅ遺跡第10次調査**（AOE10・屋外環境整備（駅前広場）に伴う調査）

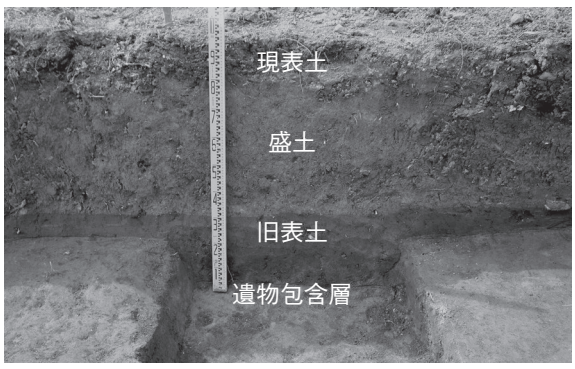
本調査は、2015年12月に開業する仙台市高速鉄道（地下鉄）東西線青葉山駅から理学研究科へ至る歩道などの整備工事に伴うものである（図10）。この工事計画では、①工事予定範囲南側に位置する体育館の脇に歩道を設置する区域と、②東南側の崖沿いの崩落の危険がある部分を削平して整える区域において、青葉山Ｅ遺跡の遺物包含層が削平されることが想定された。これら以外の区域では、表層を撤去し、芝貼りや歩道を設置する工事であり、掘削深度は浅く遺構・遺物への影響は無いと考えられた。②の崖沿いの削平部分については、削平される範囲と排水溝が設置される部分までを調査対象として、記録保存のための事前調査を実施することとした。この地点は、第９次調査地点（AOE９：『調査報告』４）に隣接している。

また、今回の調査予定範囲内には、1996年度に行った第５次調査（AOE５:『年報』14）の際に、「給水管区」として調査した区域がある。この調査区では、遺物包含層（２層）が分布していたが、薄くなっていた。この調査区の西側では工事による掘削が２層まで達しないため、２層を掘り上げることは行っていない。東側では２層を掘り上げたが、遺物は発見されなかった。この調査結果より、南側ほど包含層の堆積状況が良くないことが想定され、①の南側歩道部分については、確認調査を行う必要があった。そのため、2015年３月に確認調査を行い、包含層の残存状況を確認してから、その結果に応じて①の区域の調査区を定めることとした。

2014年度の確認調査では、南側歩道工事範囲内の中央に南北のトレンチを設定した。基本土層は、これまでの調査と同様に、現地表下に盛土があり、その下に旧表土面と考えられる層が確認できた。さらにその層の下には、遺物包含層である２層が存在し、縄文土器などの出土が確認された（図10－２・３）。そのため、①の区域の全域についても、2015年度に本調査を実施することとした。この調査の概要は『年次報告』2015にてまとめたい。

１．南側試掘区（北から）

２．遺物出土状況（北から）




３．土層断面（南側調査区）

図10　青葉山Ｅ遺跡第10次調査状況

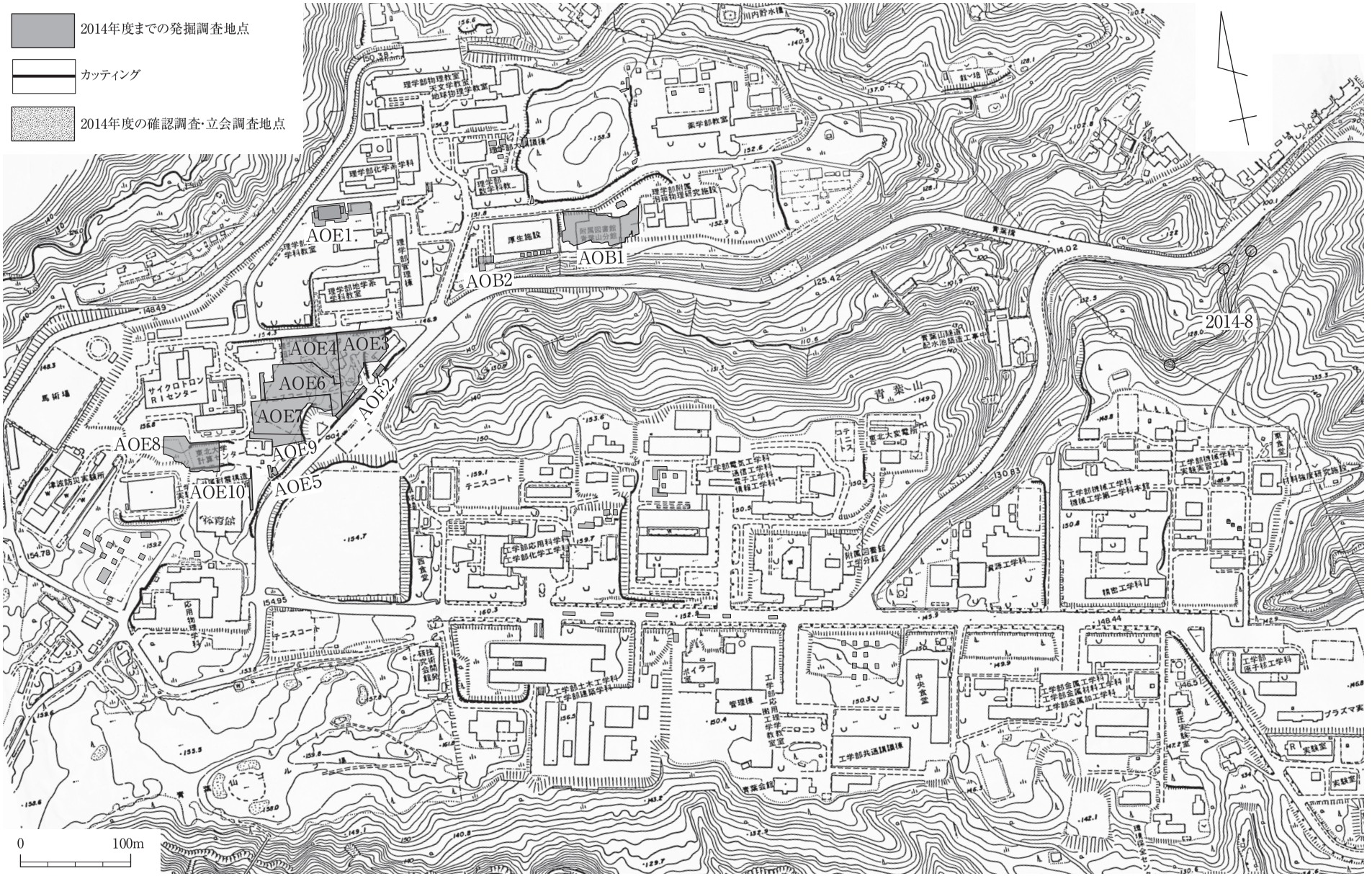



図11　青葉山地区調査地点

b．立会調査

・遊歩道法面保護工事（2014－8）

本工事の対象となる遊歩道は、青葉山機械系キャンパスエリアと川内キャンパスを結ぶ経路として、かねてより学生・教職員の重要な通行路として機能していた。しかし、その遊歩道法面が崩壊し、危険な状態となっていたことから全面通行止めとなっていた。この通行止めを解消するために、崩落法面部分の整形・保護を行う工事を実施することとなった。この工事の掘削は法面整形部に留まるもので、遺物包含層や遺構・遺物などは全く確認できず、問題はなかった。

## ２．遺物整理作業

2014年度は、次の３件の整理作業を実施した。

①青葉山Ｅ遺跡第９次調査（AOE９）の整理作業

2012年度に実施した、理学系総合研究棟新築復旧に伴う調査である。土坑７基が検出され、縄文時代早期と中期の土器や石器が約250点（２箱）出土している。2014年度は、遺構図面・遺物図面・写真の編集、遺物写真撮影、観察表作成、レイアウトなどの作業を実施した。本調査の整理作業は当年度で終了した。

②芦ノ口遺跡第９次調査（TM９）の整理作業

2012年度に実施した、電子光理学研究センターＲＩ排水処理設備改修に伴う調査である。沢状の落ち込みが検出され、その周辺から、縄文土器・石器や土師器が２箱出土している。2014年度は、遺構図面・遺物図面・写真の編集、遺物写真撮影、観察表作成、レイアウトなどの作業を実施した。本調査の整理作業は当年度で終了した。

③仙台城跡北方武家屋敷地区第16地点（BK16）の整理作業

2013年度に実施した、学生支援センター新営に伴う調査である。二の丸に伴う堀や、近世の溝などが検出され、それらの遺構から、陶磁器類などが19箱出土している。2014年度は、空撮測量図面や手書き図面の整理、遺物の洗浄・注記・接合・集計などの基礎的作業を実施している。

## ３．年次報告・調査報告の刊行

2014年度は、『年次報告』１冊、『調査報告』１冊の、合計２冊を印刷刊行した。

『年次報告』としては、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2013を印刷刊行した。2013年度に調査室が行った各種事業と、本調査３件、確認調査１件、立会調査10件の概要を掲載した。

『調査報告』としては、『芦ノ口遺跡第９次調査・青葉山E遺跡第９次調査』（『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』４）を印刷刊行した。2012年度に実施した青葉山団地の理学系総合研究棟新築復旧に伴う調査と、富沢団地の電子光理学研究センターＲＩ排水処理設備改修に伴う調査の２件の発掘調査成果を取りまとめたものである。

## ４．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。木製品・金属製品については、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（『年報』16）。

2011年度までの作業によって、一部の大型製品を除くと、2010年度までの調査で出土した木製品については、保存処理は終了している。2011年度以降の調査では、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）、第15地点（BK15）などで木製品が出土しており、出土直後の応急対応と、その後の保存処理を行っている。これらの本格的な保存処理は、整理作業が進んだものから、翌年度以降に行う予定である。また、竹製品について、二

の丸地区第17地点（NM17）、武家屋敷地区第７地点（BK７）の図化していない資料の保存処理作業に着手した。

銅製品については、2012年度までの作業によって、2010年度調査以前に出土したものについては、保存処理を終了している。しかし、保存処理体制が整う2000年度以前の調査で出土した銅製品を再確認したところ、未処理のままとなっていた資料が若干確認された。そのため、これらの資料の保存処理を2013年度から実施し、2014年度にはほぼ終了した。

鉄製品については、釘をはじめとして大量の遺物が出土しているが、図化して報告した資料以外は、ほとんどが未処理のままである。前年度に引き続き、これら未処理のままとなっていた鉄製品の状況を確認するとともに、保存処理を行っている。今後も、継続して作業を行っていく予定である。

## ５．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜、木箱を作成して収納している。また2009年度より、収蔵用の箱に木製箱を採用している。油脂製のコンテナは、火災の際に甚大な被害を受けるのに対して、木製箱は耐熱性が高く火災時に燃焼するまでの時間が長いことが明らかとなっている。そのため東北大学埋蔵文化財調査室では、整理作業後の収蔵保管にあたっては、油脂製箱から木製箱へ取り替えていくこととし、2009年度から一部は木製箱へ詰め替えを行っている。

これら遺物の全体量を把握するために、容器の種類や大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、この中には含まれていない。東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表４と図12である。

2014年度の調査によって新たに増加した箱数は、143箱である（二の丸地区第18地点28箱・武家屋敷地区第15地点115箱）。2014年度には、青葉山地区の青葉山Ｅ遺跡第９次調査と富沢地区の芦ノ口遺跡第９次調査の整理作業が完了した。青葉山E遺跡第９次調査では、整理後は詰め直しにより３箱となった。芦ノ口遺跡第９次調査では、整理後２箱である。そのため、整理報告済みの箱数は５箱増加して2,843箱となった。未整理のものは、差し引きで138箱増加し254箱となった。合計の遺物総量は、3,097箱である。この内、整理・報告済みのものの比率は91.8％である。

## ６．研究活動

### （1）受託研究・共同研究・研究協力等

2014年度は受託研究・共同研究・研究協力等は実施していない。

### （2）学会発表等

2014年度に実施した、調査室の業務に関わる学会での研究発表等としては、以下の１件を行った。

・平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会　2014年12月13日　於：東北歴史博物館　主催：宮城県考古学会
「仙台城跡二の丸地区第18地点」口頭発表

### （3）科学研究費採択状況

2014年度は採択されていない。

表４　年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

| 年　度 | 未整理箱数 | 整理済箱数 | 合計箱数 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1983 | 104 | 0 | 104 | |
| 1984 | 4 | 104 | 108 | 年報１（1983年度調査分）刊行 |
| 1985 | 113 | 108 | 221 | 年報２（1984年度調査分）刊行 |
| 1986 | 245 | 108 | 353 | |
| 1987 | 293 | 108 | 401 | |
| 1988 | 920 | 108 | 1,028 | |
| 1989 | 811 | 221 | 1,032 | 年報３（1985年度調査分）刊行 |
| 1990 | 1,218 | 221 | 1,439 | |
| 1991 | 1,086 | 401 | 1,487 | 年報４・５（1986・87年度調査分）刊行 |
| 1992 | 463 | 1,028 | 1,491 | 年報６（1988年度調査分）刊行 |
| 1993 | 732 | 1,032 | 1,764 | 年報７（1989年度調査分）刊行 |
| 1994 | 742 | 1,032 | 1,774 | |
| 1995 | 861 | 1,032 | 1,893 | |
| 1996 | 469 | 1,439 | 1,908 | 年報８（1990年度調査分）刊行 |
| 1997 | 435 | 1,491 | 1,926 | 年報９・10（1991・92年度調査分）刊行 |
| 1998 | 236 | 1,774 | 2,010 | 年報11・12（1993・94年度調査分）刊行 |
| 1999 | 117 | 1,893 | 2,010 | 年報13（1995年度調査分）刊行 |
| 2000 | 751 | 1,926 | 2,677 | 年報14・15・16（1996・97・98年度調査分）刊行 |
| 2001 | 1,216 | 1,926 | 3,142 | 年報17（1999年度調査分）刊行 |
| 2002 | 1,234 | 1,926 | 3,160 | |
| 2003 | 491 | 2,370 | 2,861 | 二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少 |
| 2004 | 491 | 2,370 | 2,861 | 年報18（2000年度調査分）刊行 |
| 2005 | 472 | 2,384 | 2,856 | 年報19－１・20（2001・02年度調査分）刊行 |
| 2006 | 467 | 2,391 | 2,858 | 年報19－３・21（2001・03年度調査分）刊行 |
| 2007 | 281 | 2,507 | 2,788 | 年報19－４・22（2001・04年度調査分）刊行 |
| 2008 | 198 | 2,619 | 2,817 | 年報19－２・23（2001・05年度調査分）刊行 |
| 2009 | 34 | 2,790 | 2,824 | 年報19－５・24（2001・06年度調査分）刊行　地下鉄補償関係調査整理作業終了 |
| 2010 | 34 | 2,790 | 2,824 | |
| 2011 | 78 | 2,790 | 2,868 | 調査報告１（武家屋敷地区第11・12地点）刊行 |
| 2012 | 65 | 2,836 | 2,901 | 調査報告２（武家屋敷地区第13地点）刊行 |
| 2013 | 116 | 2,838 | 2,954 | 調査報告３（芦ノ口遺跡第７・８次調査）刊行 |
| 2014 | 254 | 2,843 | 3,097 | 調査報告４（青葉山Ｅ遺跡第９次調査･芦ノ口遺跡第９次調査）刊行 |

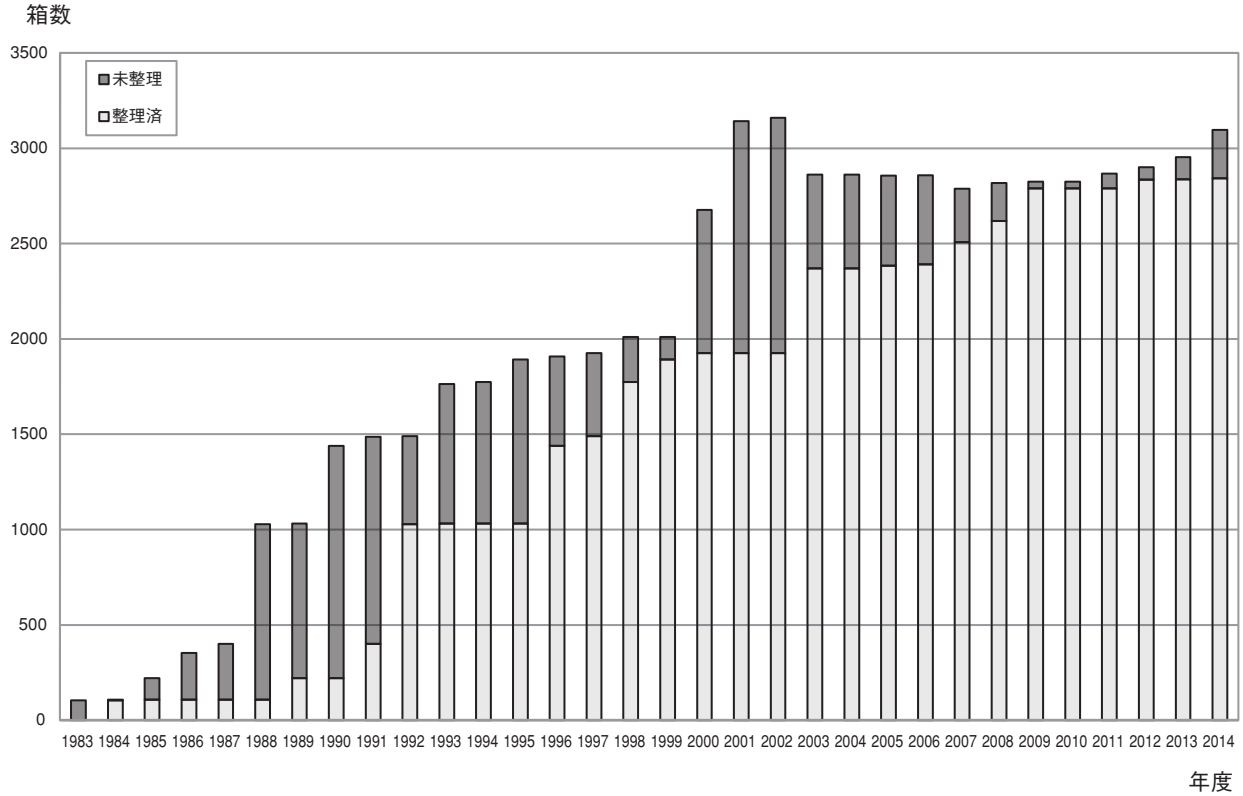



図12　収蔵遺物量の推移

## ７．教育普及活動

### （1）非常勤講師

2014年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

・藤沢　敦　放送大学宮城学習センター平成26年度第１学期面接授業「考古学から見た古代のエミシ」

・藤沢　敦　東北大学大学院文学研究科・文学部　考古学特論・各論（後期）「古墳時代研究の理論と方法」

### （2）授業など教育活動への協力

2014年度の学内外での授業などの教育活動への協力としては、国際文科研究科の深澤百合子教授が担当する授業において、発掘調査現場の見学が５月28日に行われている。仙台城跡二の丸地区第18地点の調査現場において、発掘調査の状況などを解説した。

### （3）保管資料の貸出

2014年度における、調査室保管資料の貸し出し依頼としては、次の１件であった。

・貸 出 先：宮城県教育庁文化財保護課「平成26年度宮城の発掘調査パネル展」

・貸出資料：仙台城跡二の丸地区第18地点調査写真・図面５点

・展示期間：2015年３月30日～４月10日

・貸出期間：2015年１月23日～４月10日

### （4）外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢　敦

2014年６月28・29日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

2014年７月15日　阿光坊古墳群整備検討委員会　於：青森県おいらせ町東公民館

2014年８月28日　第31回仙台城跡調査指導委員会　於：仙台市役所

2014年９月13・14日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

2014年11月７・８日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：群馬県埋蔵文化財調査事業団、かみつけの里博物館、群馬県内古墳等関連遺跡

2014年12月19・20日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

2015年１月28日　第32回仙台城跡調査指導委員会　於：庄建上杉ビル

2015年３月７・８日　国立歴史民俗博物館基幹研究「東アジア世界における倭世界の実態」共同研究員
於：国立歴史民俗博物館

担当者：菅野智則

2014年７月５・６日　国立歴史民俗博物館基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」
共同研究員　於：国立歴史民俗博物館

2014年８月23・24日　機関の研究計画に基づく共同研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性－歴史生態学からのアプローチ」 共同研究員

於：総合地球環境学研究所

2014年11月４・５日　機関の研究計画に基づく共同研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性－歴史生態学からのアプローチ」 共同研究員
於：総合地球環境学研究所

2014年12月20・21日　国立歴史民俗博物館基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」
共同研究員　於：国立歴史民俗博物館

2015年１月11～13日　機関の研究計画に基づく共同研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性－歴史生態学からのアプローチ」 共同研究員
於：総合地球環境学研究所

2015年２月28日・３月１日　文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」
於：東北芸術工科大学東北文化研究センター

### （5）広報活動

・川内萩ホール展示ギャラリー常設展

東北大学川内南キャンパスにある「東北大学百周年記念会館（川内萩ホール）」には、エントランスホールに展示ギャラリーが設けられている。この展示ギャラリーは、本部総務部広報課が事務担当となり、学内からの公募によって、学内の研究資料や研究成果を紹介するために使用されている。しかし、年間を通じた全ての期間を、公募の展示で構成することには困難が伴うことから、一定期間を常設展とすることとなった。東北大学史料館が中心となり、植物園・埋蔵文化財調査室が協力し、川内キャンパスの歴史を基本テーマとする常設展「川内今昔物語」を2011年度から行っている。

2014年度も、常設展として展示を行っている。東北大学のホームカミング・デーの前後には、関連する展示などが行われるため、10月11日に常設展を一旦撤収した。他の展示などが終了した後に常設展を再度設営し公開している。

展示の内容は、これまでと基本的に同じ内容である。展示資料のほとんどは、埋蔵文化財調査室が保管している出土資料で構成されている。江戸時代の各種遺物が中心であるが、縄文時代・弥生時代・古代の遺物、近代の陸軍第二師団に関わる遺物も展示している。

・調査室ウェブサイト

2011年度から、東北大学の情報シナジー機構・サイバーサイエンスセンターにおいて、ウェブホスティングサービスの試行提供が開始された。これを利用して、埋蔵文化財調査室のウェブサイトを2012年２月から公開した。調査室で刊行した調査報告書については、次に述べる遺跡資料リポジトリが東北大学図書館により進められており、pdfファイルが公開されている。調査室のウェブサイトでは、遺跡資料リポジトリとリンクし、そちらを参照できるようにした。これにより、調査室のウェブサイトで必要な容量を少なくできることから、ウェブホスティングサービスの契約内容は、サブドメインなし（２ＧＢ）の、http://web.tohoku.ac.jp/maibun/を取得して利用することとしている。2014年度も、これまでと同様の形態で、ウェブサイトを維持している。

・遺跡資料リポジトリでの発掘調査報告書の公開

遺跡資料リポジトリは、電子化した発掘調査報告書を公開している歴史・考古学分野のサブジェクト・リポジトリである。研究者・学生を中心に利用需要は大きいものの、小部数発行で一般には利用しにくかった発掘調査報告書を電子化・公開することで、報告書の流通と活用の促進を目的としている。2008年度に、島根大学図書館を中心に中国地方５県域から、国立情報学研究所のＣＳＩ委託事業として開始された。2010年度以降は、全国遺

跡資料リポジトリ・プロジェクトとして、対象を全国に拡大して進められてきた。

東北大学附属図書館でも、2010年度からこの事業に参加し、宮城県内の発掘調査報告書をpdfファイルとしてウェブサイトで順次公開している。埋蔵文化財調査室では、2010年度より東北大学図書館に協力し、調査室刊行の調査報告書を公開している。2014年度も、当年度に刊行した『年次報告』『調査報告』を登録して公開した。

## ８．東日本大震災による被災文化財の救援活動

2011年３月11日に発生した東日本大震災では、津波被災地域を中心に、甚大な被害が発生した。博物館・資料館、資料収蔵施設なども多くが被災し、膨大な量の文化財等が被害を受けた。個人所蔵の文化財の被害も、きわめて大きなものであった。これら被災した文化財を救援して後世に伝えることは、地域の歴史と文化を継承していくために不可欠であり、地域の復興のためにも欠かせない。そのため、被災文化財の救援活動（文化財レスキュー）が、様々な形で行われることとなった。被災文化財の救援活動は、被災した現地からの回収と安全な場所への運搬、劣化を防止するための応急処理、安定した環境での一時保管が当面の作業で、その上で本格的な修復、恒久的な施設での収蔵へとつながっていくこととなる。

埋蔵文化財調査室では、考古資料をはじめとする文化財の取り扱いに習熟し、保存処理の設備と技術を擁した専門家による機関として、被災文化財の救援活動を、震災支援の業務として行ってきた。2011年度には、文化庁が呼びかけて関係機関・団体で構成された東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会による文化財レスキュー事業に参加するとともに、ＮＰＯ資料保全ネットワークへの機材貸与などの協力などを行ってきた。被災地からの文化財の回収と運搬、応急処理は2011年度でおおむね終了し、2012年度以降は、応急処理の終了した資料の一時保管を行っている。埋蔵文化財調査室では、石巻市石巻文化センター考古収蔵庫から回収された考古資料294箱の内の194箱、女川町マリンパル女川で展示されていた考古資料を継続して一時保管してきた。このうち女川町マリンパル女川で展示されていた考古資料については、旧女川町立女川第一小学校を利用する形で文化財を収蔵する体制が整ったことから、2014年３月18日に女川町に返却された。

石巻市では多数の文化財が被災したが、被災して使用されなくなった旧石巻市立湊第二小学校を改修して、レスキューされた文化財の仮収蔵施設としている。当調査室で一時保管してきた石巻文化センター考古資料も、2015年３月24日に、石巻市が依頼した運送業者によって旧湊第二小学校仮収蔵庫へ運搬され、４年ぶりに石巻市へ戻ることとなった。これによって、当調査室での被災文化財の一時保管は終了することとなった。

救援委員会の文化財レスキュー事業は終了したが、被災した博物館・資料館などの再建には、長期の時間を要することから、被災文化財の一時保管も長期にわたることとなる。そのため、文化財レスキュー事業を引き継ぎ、被災した宮城県内の文化財の保全を図るため、文化財レスキュー事業に関わる関係機関・団体との連携・協力の下に必要な活動を行うことを目的として、宮城県被災文化財等保全連絡会議が2011年10月に設置された。被災文化財等の一時保管施設、地元市町教育委員会などから構成されることとなり、一時保管施設である東北大学埋蔵文化財調査室も、保全連絡会議に参加することとなった。

2014年度には、連絡会議は次の３回開催され、埋蔵文化財調査室でも担当者が出席した。連絡会議では、活動状況、一時保管施設での資料管理状況などについて、情報交換や協議が行われている。

第９回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2014年７月２日　於：東北歴史博物館
第10回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2014年11月19日　於：東北歴史博物館
第11回宮城県被災文化財等保全連絡会議　2015年２月19日　於：東北歴史博物館

# 〈引用・参考文献〉


仙台市教育委員会　1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』

仙台市教育委員会　1995 『仙台市太白区文化財分布地図』

仙台市史編さん委員会編　2006 『仙台市史　特別編７　城館』仙台市

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985～1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～７

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997～2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報』８～18、19－１、20

東北大学埋蔵文化財調査室　2007～2010 『東北大学埋蔵文化財調査年報』19－２・３・４・５、21～24

東北大学埋蔵文化財調査室　2010～2015『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2007～2013

東北大学埋蔵文化財調査室　2011 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点―仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書―』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

東北大学埋蔵文化財調査室　2013 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

東北大学埋蔵文化財調査室　2014 『富沢芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告３

東北大学埋蔵文化財調査室　2015 『芦ノ口遺跡第９次調査・青葉山E遺跡第９次調査―東日本大震災復旧事業関係調査報告書―』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告４

宮城県教育委員会　1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

# Ⅳ．資料

## １．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成６年５月17日　規第56号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第２条　調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職及び職員）

第３条　調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

（室長）

第４条　室長は、調査室の業務を掌理する。

２　室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

３　室長の選考は、第６条に規定する運営委員会の議を経て、総長が行う。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（文化財調査員）

第５条　文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

２　文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

（運営委員会）

第６条　調査室に、その運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

２　東北大学の学内共同教育研究施設等の運営に関する規程（平成16年規第９号）第３条の規定は、運営委員会の審議事項等について準用する。

（運営委員会の組織）

第７条　運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　キャンパス総合計画委員会の委員　若干人

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第８条　委員長は、室長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会の会務を総理する。

３　委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（調査部会）

第９条　運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

（調査部会の組織）

第10条　調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　調査室の特任准教授

二　文化財調査員

三　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

四　施設部計画課長

五　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

（部会長）

第11条　部会長は、室長をもって充てる。

２　部会長は、調査部会の会務を掌理する。

（委嘱）

第12条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

（任期）

第13条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　前項の委員は、再任されることができる。

（幹事）

第14条　運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

（事務）

第15条　調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

（雑則）

第16条　この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附　則

１　この規程は、平成６年５月17日から施行する。

２　東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

３　東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附　則（平成16年４月１日規第207号改正）

この規程は、平成16年４月１日から施行する。

附　則（平成18年４月26日規第80号改正）

１　この規程は、平成18年４月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年４月１日から適用する。

２　平成18年４月１日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第４条第３項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第４項の規定にかかわらず、平成18年５月16日までとする。

附　則（平成19年４月１日規第76号改正）

この規程は、平成19年４月１日から施行する。

附　則（平成25年４月23日規第56号改正）

この規程は、平成25年４月23日から施行し、改正後の第７条第１項の規程は、平成25年４月１日から適用する。

附　則（平成27年３月23日規第18号改正）

この規程は、平成27年４月１日から施行する。

## ２．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2014年度）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 室　　長（文学研究科　教授） | 阿子島　　香 |
| 委　員 | キャンパス総合計画委員会（川内キャンパス環境整備協議会・国際文科研究科長） | 黒　田　　卓 |
| | キャンパス総合計画委員会（青葉山キャンパス環境整備協議会・理学研究科長） | 早　坂　忠　裕 |
| | キャンパス総合計画委員会（キャンパスデザイン室特任教授） | 杉　山　　丞 |
| | 学術資源研究公開センター　教　授 | 柳　田　俊　雄 |
| | 学術資源研究公開センター　准教授 | 高　嶋　礼　詩 |
| | 文学研究科　教　授 | 柳　原　敏　昭 |
| | 文学研究科　准教授 | 鹿　又　喜　隆 |
| | 文学研究科　准教授 | 堀　　裕 |
| | 工学研究科　准教授 | 飛ヶ谷　潤一郎 |
| | 災害科学国際研究所　准教授 | 佐　藤　大　介 |
| | 施　設　部　長 | 藤　井　　隆 |
| 幹　事 | 施　設　部　計画課長 | 木　村　吉　宏 |

## ３．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2014年度）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 室　　長（文学研究科　教授） | 阿子島　　香 |
| 委　員 | 学術資源研究公開センター　教　授 | 柳　田　俊　雄 |
| | 学術資源研究公開センター　准教授 | 高　嶋　礼　詩 |
| | 文学研究科　教　授 | 柳　原　敏　昭 |
| | 文学研究科　准教授 | 鹿　又　喜　隆 |
| | 文学研究科　准教授 | 堀　　裕 |
| | 工学研究科　准教授 | 飛ヶ谷　潤一郎 |
| | 災害科学国際研究所　准教授 | 佐　藤　大　介 |
| | 埋蔵文化財調査室　文化財調査員（特任准教授） | 藤　沢　　敦 |
| | 埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員） | 柴　田　恵　子 |
| | 埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員） | 菅　野　智　則 |
| | 施　設　部　計画課長 | 木　村　吉　宏 |

## ４．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

| 書　名 | 刊行年 | 掲載内容 | 刊行主体 |
|---|---|---|---|
| 東北大学埋蔵文化財調査年報１ | 1985 | 昭和58年度（1983年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 仙台城跡二の丸第１地点（NM１） | |
| | | 仙台城跡二の丸第２地点（NM２） | |
| | | 仙台城跡二の丸第３地点（NM３） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報２ | 1986 | 昭和59年度（1984年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 青葉山Ｂ遺跡第１次調査（AOB１） | |
| | | 青葉山Ｂ遺跡第２次調査（AOB２・旧称AOF） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第１次調査（AOE１） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報３ | 1990 | 昭和60年度（1985年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 仙台城跡二の丸第６地点（NM６） | |
| | | 芦ノ口遺跡第１次調査（TM１） | |
| | | 芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査（TK） | |
| | | 研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報４・５ | 1992 | 昭和61年度（1986年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 昭和62年度（1987年度）事業概要 | |
| | | 仙台城跡二の丸第４地点（NM４） | |
| | | 仙台城跡二の丸第７地点（NM７） | |
| | | 仙台城跡二の丸第８地点（NM８） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報６ | 1993 | 昭和63年度（1988年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 仙台城跡二の丸第５地点（NM５） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報７ | 1994 | 平成１年度（1989年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査委員会 |
| | | 仙台城跡二の丸第５地点（NM５）付帯施設部分 | |
| | | 仙台城跡二の丸第５地点（NM５）調査成果の検討 | |
| | | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（BK５） | |
| | | 川渡農場町西遺跡第１地点（KW１） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報８ | 1997 | 平成２年度（1990年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第９地点（NM９） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報９ | 1998 | 平成３年度（1991年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第10地点（NM10） | |
| | | 芦ノ口遺跡第２次・３次調査（TM２・TM３） | |
| | | 考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－ | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報10 | 1998 | 平成４年度（1992年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第13地点（NM13） | |
| | | 青葉山地区分布調査 | |
| | | 研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開 | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報11 | 1999 | 平成５年度（1993年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第12地点（NM12） | |
| | | 仙台城跡二の丸第14地点（NM14） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第２次調査（AOE２） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報12 | 1999 | 平成６年度（1994年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第15地点（NM15） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第３次調査（AOE３） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報13 | 2000 | 平成７年度（1995年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第11地点（NM11） | |
| | | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（BK４） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第４次調査（AOE４） | |
| | | 研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法 | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報14 | 2001 | 平成８年度（1996年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（BK６） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第５次調査（AOE５） | |
| | | 芦ノ口遺跡第４次調査（TM４） | |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報15 | 2001 | 平成９年度（1997年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| | | 仙台城跡二の丸第16地点（NM16） | |
| | | 青葉山Ｅ遺跡第６次調査（AOE６） | |

| 書　名 | 刊行年 | 掲載内容 | 刊行主体 |
|---|---|---|---|
| 東北大学埋蔵文化財調査年報16 | 2001 | 平成10年度（1998年度）事業概要<br>研究編－糖アルコール含浸法における予備実験 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報17 | 2002 | 平成11年度（1999年度）事業概要 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報18 | 2005 | 平成12年度（2000年度）事業概要<br>仙台城跡二の丸第17地点（NM17） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報19<br>第１分冊 | 2006 | 平成13年度（2001年度）事業概要<br>芦ノ口遺跡第５次調査（TM５）<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）<br>遺構 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報19<br>第２分冊 | 2009 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）<br>陶磁器・土器・土製品・瓦 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報19<br>第３分冊 | 2007 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）<br>木簡・墨書ある木製品 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報19<br>第４分冊 | 2008 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）<br>その他の遺物 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報19<br>第５分冊 | 2010 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）<br>分析・考察 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報20 | 2006 | 平成14年度（2002年度）事業概要<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（BK８）<br>青葉山Ｅ遺跡第７次調査（AOE７）<br>青葉山Ｅ遺跡第８次調査（AOE８） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査研究センター |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報21 | 2007 | 平成15年度（2003年度）事業概要<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（BK９）<br>芦ノ口遺跡第６次調査（TM６） | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報22 | 2008 | 平成16年度（2004年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報23 | 2009 | 平成17年度（2005年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査年報24 | 2010 | 平成18年度（2006年度）事業概要<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10）<br>青葉山新キャンパス地区試掘調査 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

| シリーズ名 | 書　名 | 刊行年 | 掲載内容 | 刊行主体 |
|---|---|---|---|---|
| 東北大学<br>埋蔵文化財調査室<br>調査報告１ | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点<br>－仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－ | 2011 | 東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）<br>仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12）<br>川内地区の絵図記載人名の検討<br>川内地区における江戸時代の道路の復元 | 東北大学<br>埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学<br>埋蔵文化財調査室<br>調査報告２ | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点 | 2013 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学<br>埋蔵文化財調査室<br>調査報告３ | 芦ノ口遺跡第７次調査・第８次調査 | 2014 | 芦ノ口遺跡第７次調査（TM７）・第８次調査（TM８） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学<br>埋蔵文化財調査室<br>調査報告４ | 芦ノ口遺跡第９次調査・青葉山Ｅ遺跡第９次調査－東日本大震災復旧事業関係調査報告書－ | 2015 | 芦ノ口遺跡第９次調査（TM９）・青葉山Ｅ遺跡第９次調査（AOE９） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学<br>埋蔵文化財調査室<br>調査報告５ | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点 | 2016 | 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16） | 東北大学<br>埋蔵文化財調査室 |

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

| 書　名 | 刊行年 | 掲載内容 | 刊行主体 |
|---|---|---|---|
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007 | 2010 | 平成19年度（2007年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008 | 2010 | 平成20年度（2008年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009 | 2012 | 平成21年度（2009年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010 | 2012 | 平成22年度（2010年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011 | 2013 | 平成23年度（2011年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012 | 2014 | 平成24年度（2012年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013 | 2015 | 平成25年度（2013年度）事業概要<br>芦ノ口遺跡第10次調査（TM10） | 東北大学埋蔵文化財調査室 |
| 東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2014 | 2016 | 平成26年度（2014年度）事業概要 | 東北大学埋蔵文化財調査室 |

＊これらの刊行物は、東北大学機関リポジトリTOURおよび全国遺跡報告総覧で全て公開している。
東北大学機関リポジトリTOUR　http://ir. library. tohoku. ac. jp/re/
全国遺跡報告総覧　http://sitereports. nabunken. go. jp/ja

**東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2014**

平成28年３月31日

発 行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
ＴＥＬ　022（217）4995

印 刷　株式会社 東　北　プ　リ　ン　ト
〒980-0822 仙台市青葉区立町24－24
ＴＥＬ　022（263）1166

# Annual report in fiscal year 2014

## Archaeological Research office on the Campus, Tohoku University